「令和 2 年度 IB の教育効果に関する調査研究事業」

2020 年度成果報告書

研究代表者

筑波大学人間系教育学領域教授

井田　仁康

「令和 2 年度 IB の教育効果に関する調査研究事業」
2020 年度成果報告書

目　　次

第 1 章　研究の概要 1

1-1.　研究目的 1

1-2.　研究方法 2

1-3.　研究期間 3

1-4.　研究組織 3

1-5.　全体打ち合わせ開催日程 4

第 2 章　定量研究の概要 5

2-1.　研究の概要 5

2-2.　実施体制 5

2-3.　進捗状況 5

2-4.　調査実施計画 6

2-5.　質問紙の開発 8

2-6.　予備調査の実施 9

2-7.　今後の計画 17

【資料】 18

第 3 章　定性研究の概要 32

3-1.　研究の概要 32

3-2.　先行研究の検討 32

3-3.　調査方法 33

3-4.　分析方法 35

3-5.　結果と考察 36

3-6.　まとめ 40

【資料】 43

第 4 章　今年度の研究成果 60

【巻末資料】 62

【引用・参照文献一覧】 76

第１章　研究の概要

1-1. 研究目的

国際バカロレア（International Baccalaureate：以下、IB）は、グローバル化に対応した人材を育成するための国際的な教育プログラムである。日本では、IB 教育プログラムを導入する学校数は、なだらかに上昇を続け、2020 年 11 月 30 日時点で IB 認定校等（認定校、及び認定候補校）は、161 校となった（文部科学省 IB 推進コンソーシアムウェブサイト）。IB 教育のこうした普及の背景には、昨今の日本における教育政策との関連性が指摘できる。文部科学省（2015a）は、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体的に学習に取り組む態度（学びに向かう力）を、育成すべき資質・能力の 3 つの柱と位置づけ、児童生徒が多様な人々と協働していくことができるように、包括的・全人的に児童生徒を育む教育の価値を強調する。この教育政策と IB 教育プログラムは、児童生徒の包括的・全人的な「学力」育成を志向する点が共通している。

日本における IB 教育は、（1）世界で活躍する人材育成、（2）人材流動性の向上、（3）高等教育の改善のためのカリキュラムマネジメントへの波及の 3 つの動機に基づいて普及し、拡大されてきた（永山 2013）。IB の公式言語は、英語、フランス語、スペイン語であるが、国際的に通用する大学入学資格が取得可能な IB ディプロマプログラムでは、科目の一部を日本語で実施できるように、文部科学省と国際バカロレア機構が協力して、ディプロマプログラム（DP）の一部の科目を日本語でも実施可能とするプログラムの開発を、現在も進めている（文部科学省 2015b）。

このように、現在も IB 教育は拡大の一途をたどり、今日も教育現場でその実践が行われている。しかし、日本では「主体的・対話的で深い学び」の実現が推し進められる一方で、IB 教育プログラムを導入した教育研究は十分な蓄積がない。特に IB 教育が、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体的に学習に取り組む態度の、3 つの要素から成る「学力」の育成に、どの程度、そしていかに、資するのかという問いを検討した試みは少ない。さらに、この問いに関して、学校教育法第 1 条に規定される学校（以下、1 条校）における IB 教育の実践に焦点を当てて検証を行った調査・研究は極めて限られているのが現状である。

そこで、本調査研究では、IB 教育の実践を通じて児童生徒が培う学力の変化を実証的に明らかにすることを目的とする。特に 1 条校における IB ディプロマプログラムの教育実践に焦点を当てて、その教育効果を、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体的に学習に取り組む態度の 3 つの観点から検討する。本調査研究では、IB カリキュラムを履修している生徒（以下、IB 生）と履修していない生徒（以下、非 IB 生）を比較対象とする。IB 教育は「どの程度」多面的な能力の育成に資するのかについて定量的調査を行い、IB 教育は「いかに」多面的な能力の育成に資するのかについて定性的調査を実施する。

1-2. 研究方法

本調査研究では、文部科学省国際バカロレア（IB）教育推進コンソーシアム研究プロジェクト「日本における国際バカロレア教育の効果に関する研究」の 2019 年度の成果を踏まえ、さらに定量的、及び定性的データの収集を拡大、発展させ実施する。

○定量的調査：IB 教育は「どの程度」多面的な能力の育成に資するのか

定量的調査では、1 条校に在籍する IB 生と非 IB 生を対象として質問紙調査を実施する。そして、IB 教育は「どの程度」多面的な能力の育成に資するのかを検討するために、IB 教育と日本の学習指導要領に準拠した教育の比較をする。

具体的には、IB 教育における時間的前後関係の影響を考慮し、パネル調査（同じ調査対象者に対して一定期間に繰り返し質問紙調査を行うこと）の方法をとる。これにより、IB 教育を通じた生徒の変化の可視化を試みる。

本定量的調査では調査期間を通じて、IB 生と非 IB 生を対象に質問紙調査を、複数回実施する。調査項目の開発には、「日本における国際バカロレア教育の効果に関する研究」の 2019 年度の成果（予備調査を含む。2019 年 12 月実施。N=23）と先行研究（Yamamoto, *et al.*, 2016）を参考とした。それら成果に含まれる生徒の社会的背景などの経済的な個人特性と、Yamamoto, *et al.*（2016）と重複する本調査の項目の結果を総合しながら、分析を実施する。

以上の定量的調査を通じて、IB 教育における多面的な能力の「伸び」を測ることを試みる。そして、本定量調査と定性的調査の結果もあわせて、その「伸び」が、「なぜ」もたらされたかという点について、そのメカニズムの分析を試みる。

○定性的調査：IB 教育は「いかに」多面的な能力の育成に資するのか

定性的調査では、1 条校で IB 教育を実践する教員（以下、IB 教員）を対象としたインタビュー調査を実施する。それによって以下について明らかにすることを試みる。

「IB カリキュラムの、どの側面（科目・要件）が、あるいは IB 教育が採用するいかなる教育方法（協働型のインタラクティブな授業形式、ルーブリック評価の手法等）によって、生徒は、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体的に学習に取り組む態度等を育んでいると、IB 教員は考えるか」

本研究では、IB 認定校の教員に対して質的調査を通じて、以下に示す調査項目について聞き取りを実施する。インタビュー対象者の選定は、日本国際バカロレア教育学会の会員の現職教員を中心に調査依頼を行なう。具体的な研究方法としては、IB 認定校の教員に対してフォーカス・グループ（1 グループ 3～4 名。教科を超えた教員グループを想定）によるディスカッションや振り返り（省察）を通じて、IB 教育の実践や授業がもたらす教員の

成長、変化、課題等について検討する。時間は1時間程度を予定している。なお、学校管理職やIBコーディネーターはグループに含まないこととする。

また、今般の新型コロナウィルス感染拡大の状況に鑑み、インタビュー協力者には、対面、もしくはオンライン（Zoom 利用予定）でのインタビューを選択してもらう。インタビューは、協力校及び調査対象者に許可を得たうえでICレコーダーを用いて録音する。

1-3. 研究期間

研究期間は以下の通りである。

2020年10月～2021年2月

1-4. 研究組織

日本国際バカロレア教育学会・研究委員会を中心として、17名の研究グループを組織した。また、本報告書の執筆担当は下記の通りである。

〈研究代表者〉

井田　仁康（筑波大学）

〈研究分担者〉

川口　純（筑波大学）
齊藤　貴浩（大阪大学）
菊地　かおり（筑波大学）
江幡　知佳（筑波大学大学院）
福嶋　將人（筑波大学大学院）
神田　あずさ（筑波大学）
赤塚　祐哉（早稲田大学）
花井　渉（大学入試センター）
井上　志音（灘中・高等学校）
木村 光宏（神奈川県立横浜国際高等学校／早稲田大学）
御手洗　明佳（淑徳大学）
松本　暢平（千葉大学）
菅井　篤（開智望小学校／筑波大学）

〈研究協力者〉

江里口　歡人（玉川大学）
渋谷　真樹（日本赤十字看護大学）
原　和久（都留文科大学）

〈研究補助者〉

増子　雄士（筑波大学）

平野　美紀子（筑波大学）

池田　亜都沙（筑波大学）

1-5. 全体打ち合わせ開催日程

第 1 回　2020 年 10 月 12 日（月）18 時～19 時／Zoom 開催

第 2 回　2020 年 11 月 30 日（月）18 時～20 時／Zoom 開催

第 3 回　2021 年 2 月 8 日（月）18 時～19 時／Zoom 開催

第 2 章　定量研究の概要

2-1. 研究の概要

本調査研究では、国際バカロレア（IB）教育の実践を通じて、生徒が培う学力（獲得する能力）の変化を実証的に明らかにすることを目的とする。定量研究では、とくに、1 条校における IB ディプロマプログラム（DP）の教育実践に焦点を当てて、IB 教育が「どの程度」多面的な能力の育成に資するのかという点に着目し、その教育効果を検証することを研究課題とする。

2-2. 実施体制

2020 年度の定量研究の主要メンバーは下記の通りである。

菊地 かおり（筑波大学・助教）※定量研究統括
齊藤 貴浩（大阪大学・教授）
御手洗 明佳（淑徳大学・准教授）
松本 暢平（千葉大学・特任助教）
江幡 知佳（筑波大学大学院・院生）
福嶋 將人（筑波大学大学院・院生）
〔アドバイザー〕
木村 光宏（神奈川県立横浜国際高等学校・教諭／
早稲田大学教育総合研究所・特別研究員）

2-3. 進捗状況

2020 年度は、研究期間中に打ち合わせを 7 回実施し、主に、①調査計画の具体化、並びに、②質問紙の開発を行った。詳細は【表 2-1】の通りである。新型コロナウィルス感染拡大の影響から、基本的にはオンライン（Zoom）での打ち合わせを行ったが、対面での打ち合わせが必要となった際は、感染防止に最大限配慮した上で実施した。

【表 2-1】打ち合わせの実施状況

第 1 回	日時：2020 年 11 月 5 日（木） 方法：Zoom	・2019 年度の研究の進捗確認 ・今後の進め方の確認 ・調査計画の原案作成
第 2 回	日時：2020 年 11 月 19 日（木） 方法：Zoom	・調査実施時期の検討 ・調査方法及び対象の検討 ・データの集計方法の確認
第 3 回	日時：2020 年 11 月 25 日（水） 場所：筑波大学	・調査実施時期及び分析方法の検討 ・質問項目の検討

第 4 回	日時：2020 年 11 月 26 日（木） 方法：Zoom	・調査実施時期の検討 ・質問項目の検討
第 5 回	日時：2020 年 12 月 14 日（月） 場所：筑波大学	・質問項目の検討
第 6 回	日時：2021 年 1 月 20 日（水） 方法：Zoom	・質問項目の検討
第 7 回	日時：2021 年 1 月 27 日（水） 方法：Zoom	・質問紙の最終確認

2-4. 調査実施計画

調査実施計画については、次ページの【表 2-2】に示す通りである。

まず、2020 年度は、2021 年 3 月に、高校 3 年生に対してパイロット調査を行う【第 1 回】。IB 生・非 IB 生を対象とする。非 IB 生については、進学クラス等がある場合には対象群として選定し、IB 生と同程度のクラスサイズで調査を実施する。もし、進学クラス等がない場合には、学校の希望により、全数、あるいは数クラスを選定してもらう。新型コロナウィルス感染拡大の状況を踏まえ、質問紙による回答か、オンラインフォーム（Google form）による回答かを選択してもらう。

次に、2021 年度は、まず、2021 年 4 月に、高校 1 年生及び 2 年生に対して本調査を行う【第 2 回】。IB 生・非 IB 生を対象とする。非 IB 生については、進学クラス等がある場合には対象群として選定し、IB 生と同程度のクラスサイズで調査を実施する。もし、進学クラス等がない場合には、全数調査を行う。調査対象校に質問紙を郵送し、回答を返送してもらう。また、2021 年 7 月～9 月の間に、高校 3 年生を対象としたパイロット調査を行う【第 3 回】。対象の選定方法は、第 2 回と同様である。

最終年度となる予定の 2022 年度は、2022 年 4 月に、高校 1 年生及び 2 年生に対して本調査を行う【第 4 回】。また、2022 年 7 月～9 月の間に、高校 3 年生を対象とした本調査を行う【第 5 回】。いずれも対象の選定方法は、第 2 回と同様である。

これらの第 1 回～第 5 回の調査を通じて、①高校 1 年生及び 2 年生については、4 月に定点測定を行い、その傾向を分析すること（黄色の矢印）、②高校 2 年生（IB プログラムの開始時）と高校 3 年生（IB の最終試験前まで）の能力の伸びを分析すること（青色の太い矢印）、また、③第 1 回調査と第 2 回調査の結果を疑似パネルとして分析すること（緑色の矢印）で、②の結果の見通しをあらかじめ得ることを目的としている。

高校 3 年生に対しては、どのような教育的な働きかけがその能力（学力）の伸びに影響を与えたのかをさらに詳細に検討するため、2021 年及び 2022 年の 12 月以降に質的調査（インタビュー調査）を行うことも計画している。

【表 2-2】定量調査実施計画（案）

	2020年度	2021年度			2022年度			
	2021.3.	2021.4.	2021.7～9.	2021.12～	2022.4.	2022.7～9.	2022.12～	2023.3.
量的調査	第1回	第2回	第3回		第4回	第5回		
2022年度入学 （現中2）					● 高1	―	―	最終報告書 作成
2021年度入学 （現中3）		● 高1	定点測定		● 高2	―	―	
2020年度入学 （現高1）	―	● 高2	伸びをみる（DP開始から試験前まで）			● 高3	聞き取り	
2019年度入学 （現高2）		―	● 高3 （パイロット）	聞き取り				
2018年度入学 （現高3）	○ 高3 （パイロット）							

疑似パネル

※○対象：IB生・非IB生（「進学クラス」等／「進学クラス」等ない場合全数か1クラス）／紙調査とオンライン（Google Form）を選択してもらう

※●対象：IB生・非IB生（「進学クラス」等／「進学クラス」等ない場合全数）／紙調査

2-5. 質問紙の開発

質問紙の開発にあたっては、本研究と同様の問題関心のもとに実施された先行研究として、山本ベバリーアン氏（大阪大学人間科学研究科）を研究代表者として実施されたIBによる委託研究（Yamamoto *et al.* 2016)、及び、それを参照して2019年度に作成した質問紙をもとに検討を進めた。

昨年度はIBカリキュラムを履修している生徒（IB生）を主たる調査対象とし、承諾が得られた学校については、IBプログラムを履修していない生徒（非IB生）に対しても調査を実施するという方針であった。そのため、質問紙の内容は、IB の教育プログラムに主たる焦点を当てて作成された。しかし、今年度は、IB生と非IB生をともに対象として質問紙調査を行うということに方針を修正したため、再度、IB の教育プログラムとともに、日本の学習指導要領にも同様の重きを置いて質問紙の構成を抜本的に見直すこととした。その中で、山本ら（Yamamoto *et al.* 2016）の研究成果をもとに発表を行った齊藤ら（2016）の報告において示された8因子をIB生及び非IB生が高校での学びを経て獲得する能力の手がかりとすることにした【表2-3】。

【表2-3】因子分析により抽出された因子

1. 科学的知識の獲得（Subject on science）
2. 英語能力の獲得（English competency）
3. 社会化（Socialization）
4. リーダーシップとチームワーク（Leadership and teamwork）
5. 人文系知識の獲得（Subject on humanities）
6. 能動的に行動する能力（Ability to take action）
7. 広範な知識の獲得（Knowledge）
8. 問題解決と自己統制（Problem solving and self-control）

出典：齊藤ら（2016: スライド39-40）

また、生徒の属性及び経験をより詳細に把握することで、本研究プロジェクトの意図するデータが得られるのではないかという結論に至り、下記の通り、属性（＝期待)、経験（＝行動)、能力（＝結果）という3つの要素を含めて質問紙を再構成した。

- 属性…①学校歴（国内・海外、IBプログラムの経験の有無）
  ②進路・キャリア（文理選択、希望進路、入試区分）
- 経験…①高校授業における学び（探究）の経験
  ②課外での学習時間とその内容
- 能力…①山本ら（Yamamoto *et al.* 2016）＋齊藤ら（2016）の因子分析結果
  ②現状に対する認識（学校生活の満足度、将来への展望）

加えて、進路・キャリアに関する質問項目については、高校1年生ではまだイメージが具体化していない可能性があるため、質問紙を［高校1年生用］と［高校2・3年生用］に分けて作成した。2020年度に開発した質問紙は、資料A・資料Bとして本章末に添付した。

2-6. 予備調査の実施

1）調査対象・実施時期

本研究計画の目的に適したデータを調査から収集するため、山本ら（Yamamoto *et al.* 2016）による先行研究をふまえた調査を予備的に実施した。

予備調査は、上記の2-4に記載した調査実施計画に鑑み、個別に依頼を行って協力を得られることになった2校（一方はIB校、他方は普通校）において実施した。調査対象として想定する生徒が、各質問に回答可能であるかどうかを、想定される調査票を用いて確認した。とくに、回答に要する時間の測定、並びに、質問内容の理解に関するフィードバックを得ることを重視した。また、収集したデータを集計し、実査を見据え、回答傾向の予測や質問項目の取捨選択について検討した。

【第1回予備調査】

調査実施日時：2019年12月

対象：個別に協力を得たIB校（1校）の生徒

調査方法：授業時に調査票（紙）を配布して実施

回答者数：23名（男性：5名、女性18名）

【第2回予備調査】

調査実施日時：2021年2月

対象：個別に協力を得た学校（1校）の生徒

調査方法：授業時に調査票（紙）を配布して実施

回答者数：7名（男性：4名、女性3名）

2）予備調査の実施結果

2校において実施した予備調査を通じ、上記2-5で示した実査時に用いる質問紙の回答可能性について検討を行った。両調査を通じ、生徒は各項目の内容を概ねよく理解し、滞りなく回答可能であることが確認されたが、時期をずらして1校ずつ調査を行ったことで、調査項目を段階的に洗練・精選することができた。なお、収集された結果は、サンプル数こそ限られたものであるが、データとしても本研究計画の遂行にあたって示唆に富むものであり、調査時あるいは分析時の仮説の検討も行った。概要は以下及び、章末の資料Cに記載の通りである。今後、調査協力校に対しては、調査結果を通知し、個別にフィードバックを行う予

定である。

【第１回予備調査】

①　男女比

上記記載のとおり、調査回答者の性別は、男性が 21.7%（5 名）、女性が 78.3%（18 名）であり、構成比は大きく異なっていた。

②　学校経験

重複回答があり得るが、回答時までに、日本の公立学校を経験した生徒がもっとも多く（91.3%）、2 番目に海外の現地校（43.5%）、3 番目に日本のインターナショナル・スクール（26.1%）が続いた。日本の学校を経験した者の多くは公立学校で、私立学校の経験者は少なかった（8.7%）。インターナショナル・スクールは、日本国内のそれを経験した者はある程度いるようだが、海外のそれを経験した者は少なかった（4.3%）。IB は、経験したと回答した者が 2 名（8.7%）いたが、ともに MYP であり、PYP の経験者はいなかった【表 2-4】。

【表 2-4】回答時までに経験したことのある学校種（n=23）

学校種	%	度数
1. 日本の公立学校	91.3	21
5. 海外の現地校	43.5	10
3. インターナショナル・スクール（日本）	26.1	6
6. 海外の日本人学校（補習校含む）	17.4	4
8. その他	13.0	3
2. 日本の私立学校	8.7	2
8. 国際バカロレア中等教育プログラム（MYP）	8.7	2
4. インターナショナル・スクール（海外）	4.3	1
7. 国際バカロレア初等教育プログラム（PYP）	0.0	0

③　国際バカロレアディプロマプログラム（DP）で身につく力

選択肢（「5：とても身につく」～「3：どちらともいえない」～「1：まったく身につかない」）に与えられた番号をポイントとみなし、その平均値を算出したとき、値の高かった項目の上位 3 位は、「興味のある対象について深く勉強し、理解すること」、「自らを自分自身で管理する力を身に付けること」、「自分の行動を評価し、次に生かす姿勢を身に付けること」であった。関心を寄せる対象に関する学びを深める力を身につけることを期待している生徒は多いようで、自身の行動を評価したり管理したりする力を身につけたいと考えている生徒が多いことがうかがえた。

下位3位は、「志望大学に入学できる学力を身に付けること」、「自分の良心や社会の規範に沿った行動を身に付けること」、「思いやりの心を持つこと」であった。学校教育を受験学力の獲得のための手段とはみなしていないようである。規範にもとづいた行動や思いやりは、学校教育を通じて身につけるものとは考えていないのかもしれず、回答時にすでにある程度身につけていると感じている者が多いのかもしれない【表2-5】。

【表2-5】国際バカロレアディプロマプログラム（DP）で身につく力（n=23）

項目名	平均値
(1)興味のある対象について深く勉強し、理解すること	4.65
(13)自らを自分自身で管理する力を身に付けること	4.65
(10)自分の行動を評価し、次に生かす姿勢を身に付けること	4.61
(19)志望大学に入学できる学力を身に付けること	3.96
(5)自分の良心や社会の規範に沿った行動を身に付けること	3.96
(7)思いやりの心を持つこと	3.70

④　国際バカロレアディプロマプログラムを通じてできるようになったこと

選択肢（「5：とてもあてはまる」～「3：どちらともいえない」～「1：まったくあてはまらない」）に与えられた番号をポイントとみなし、その平均値を算出したとき、値の高かった項目の上位3位は、「他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している」、「自分の良心や従うべきルールを持ち、それに基づいて行動している」、「問題を解決するために自分ができることを考える」であった。他者を理解し受容する能力、場面に応じた貢献、自律的に行動することとそのための基準などが身についたと感じる者が多いことがうかがえた。

下位3位は、「体力・身体つくりをしている」、「健康的な生活に注意している」、「ストレスを感じることがあってもリラックスして前向きにとらえることができている」であった。心身面での自己コントロールは、国際バカロレアディプロマプログラムの効果として感じにくいのかもしれない【表2-6】。

【表 2-6】国際バカロレアディプロマプログラムを通じてできるようになったこと（n=23）

項目名	平均値
(19)他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している	4.70
(17)自分の良心や従うべきルールを持ち、それに基づいて行動している	4.43
(7) 問題を解決するために自分ができることを考える	4.39
(31)ストレスを感じることがあってもリラックスして前向きにとらえることができている	3.00
(25)健康的な生活に注意している	2.70
(26)体力・身体つくりをしている	2.70

⑤　国際バカロレア「学習の方法（ATL スキル)」を身につけた程度

選択肢（「5：とても身についた」～「3：どちらともいえない」～「1：まったく身につかない」）に与えられた番号をポイントとみなし、その平均値を算出したとき、値の高かった項目の上位 3 位は、「他者とともに効果的に取り組む」、「情報を見つけ、解釈し、判断し、創造する」、「考えや情報を用い、創造するためにメディアと付き合う」であった。

下位 3 位は、「時間と課題を効果的に管理する」、「学習プロセスを（再）検討する、ＡＴＬスキルを選択し用いる」、「心理状態の管理」であった。心理状態の管理は、身につけたと感じにくいようである【表 2-7】。

【表 2-7】国際バカロレア「学習の方法（ATL スキル)」をどの程度身につけたか（n=23）

項目名	平均値
(2)他者とともに効果的に取り組む	4.00
(6)情報を見つけ、解釈し、判断し、創造する	4.00
(7)考えや情報を用い、創造するためにメディアと付き合う	4.00
(3)時間と課題を効果的に管理する	3.57
(5)学習プロセスを（再）検討する、ＡＴＬスキルを選択し用いる	3.52
(4)心理状態の管理	3.00

⑥　国際バカロレア「知の理論（TOK)」を通じて、身につけた態度

選択肢（「5：とても身についた」～「3：どちらともいえない」～「1：まったく身につかない」）に与えられた番号をポイントとみなし、その平均値を算出したとき、値の高かった項目の上位 3 位は、「ずっと新しいことを学び続けていきたいと思う」、「いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい」、「他の人の考えを自分の言葉でまとめてみる」であった。上記⑤国際バカロレアディプロマプログラムを通じてできるようになったことでもみたように、他者を理解し受容する態度、自律的に学び続ける態度を身につけたと感じる者が多いことがうかがえる。

下位 3 位は、「行動をとるときは、はっきりとした根拠に基づくようにしている」、「誰でもわかるように論理的に説明しようとする」、「決定をするときには，確かな証拠があるかどうかを注意深く考える」であった。これらは、上位 3 位の各項目を態度として身につける際の支えとなり得るものとも考えられるが、自信をもってそれらを態度として身につけたと回答しにくい項目と言えるかもしれない【表 2-8】。

【表 2-8】国際バカロレア「知の理論（TOK)」を通じて、身につけた態度（n=23）

項目名	平均値
(5)ずっと新しいことを学び続けていきたいと思う	4.57
(4)いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい	4.43
(3)他の人の考えを自分の言葉でまとめてみる	4.39
(10)決定をするときには，確かな証拠があるかどうかを注意深く考える	3.96
(2)誰でもわかるように論理的に説明しようとする	3.91
(12)行動をとるときは、はっきりとした根拠に基づくようにしている	3.83

⑦　高校卒業後の進路

高校卒業後の進路について、第一希望としてもっとも多かったのは「海外の大学に進学する」(60.9%）で、多くの生徒が海外大学への進学を検討していた。2 番目は「国内の大学に進学する」(43.5%）で、国内外の大学が進路の中心として検討されていることがうかがえたが、3 番目は「わからない」で、進路未定者もいるようだ【表 2-9】。

【表 2-9】高校卒業後の進路（第一希望の上位 3 位）(n=23)

進路種	%
2.海外の大学に進学する	60.9
1.国内の大学に進学する	17.4
6.わからない	13.0

⑧　国際バカロレアディプロマプログラム（DP）で学ぶ上で起こると困ること

選択肢（「5：とても困る」～「3：どちらともいえない」～「1：まったく困らない」）に与えられた番号をポイントとみなし、その平均値を算出したとき、値の高かった項目の上位 3 位は、「授業料や学費が高くなる」、「宿題が多くなる」、「課外活動や部活動に十分に参加できなくなる」であった。

下位 3 位は、「友達と違うプログラムで学ぶようになる」、「一部の授業で先生が使う言葉が日本語ではなく英語になる」、「大学の一般受験とは直接つながらない内容を学ぶようになる」であった。プログラム内容の統一性についてはあまり気にかけていないようである。また、海外の大学を第一希望としている生徒が多かったことからも、英語で学ぶことへの抵抗はほとんどないようである。学校教育の内容と大学進学とのかかわりを重要視していない生徒が多く、学校を受験準備の場所とはあまり思っていないようだ【表 2-10】。

【表 2-10】国際バカロレアディプロマプログラム（DP）で学ぶ上で起こると困ること（n=23）

項目名	平均値
(1)授業料や学費が高くなる	4.09
(2)宿題が多くなる	4.09
(5)課外活動や部活動に十分に参加できなくなる	3.52
(3)大学の一般受験とは直接つながらない内容を学ぶようになる	3.13
(6)一部の授業で先生が使う言葉が日本語ではなく英語になる	2.48
(4)友達と違うプログラムで学ぶようになる	2.22

【第 2 回予備調査】

① 男女比

第 2 回調査では、男性が 4 名、女性が 3 名で、構成比はほぼ均等となった。

② 学校経験

重複回答があり得るが、回答時までに、海外の現地校を経験した生徒がもっとも多く（57.1%）、2 番目に海外のインターナショナル・スクール（42.9%）、3 番目に海外の日本人学校（28.6%）が続いた。IB については、1 名の生徒が PYP と MYP を経験したと回答していた【表 2-11】。

【表 2-11】回答時までに経験したことのある学校種（n=7）

学校種	%	度数
海外の現地校	57.1	4
インターナショナル・スクール（海外）	42.9	3
海外の日本人学校	28.6	2
インターナショナル・スクール（日本）	14.3	1
国際バカロレア初等教育プログラム（PYP）	14.3	1
国際バカロレア中等教育プログラム（MYP）	14.3	1
あてはまるものはない	14.3	1

③ 現段階で身についていること

選択肢（「5：身についている」～「3：どちらともいえない」～「1：身についていない」）に与えられた番号をポイントとみなし、その平均値を算出したとき、値の高かった項目の上位 3 位は、「興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢」、「自分の良心や社会の規範に沿って行動する力」、「人や社会によって違った考えや文化があることへの理解」、「思い

やりの心」、「チームで協力して行動する力」、「「外国語（英語等）」の知識」であった。

下位 3 位は、「「理科（物理、化学、生物、地学等）」の知識」、「「国語（現代文、古典等）」の知識」、「現実の社会問題の仕組みを理解し、解決策を導く力」、「人間、社会、自然に対する幅広い知識」であった【表 2-12】。

【表 2-12】現段階で身についていること（n=7）

	平均値
興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢	5.00
自分の良心や社会の規範に沿って行動する力	5.00
人や社会によって違った考えや文化があることへの理解	5.00
思いやりの心	5.00
チームで協力して行動する力	5.00
「外国語（英語等）」の知識	5.00
人間、社会、自然に対する幅広い知識	3.57
現実の社会問題の仕組みを理解し、解決策を導く力	3.57
「国語（現代文、古典等）」の知識	3.57
「理科（物理、化学、生物、地学等）」の知識	3.57

④　高校の授業内での活動

選択肢（「4：よくある」～「1：まったくない」）に与えられた番号をポイントとみなし、その平均値を算出したとき、値の高かった項目の上位 3 位は、「問題集の練習問題を解くを解く」（調査票上の誤植のため、以下「問題集の練習問題を解く」とする）、「教科書の内容を暗記する」、「パソコンやタブレットを使って作業をする」であった。

下位 3 位は、「図書室を利用して資料や文献を探す」、「自分が取り組んだプロジェクト（探究・調査・実験・発表会）のよかった点や課題を整理する」、「クラスの同級生から作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける」、「学習の成果を発表する」、「海外で起こった出来事や課題について考える」であった【表 2-13】。

【表 2-13】高校の授業内での活動経験（n=7）

	平均値
問題集の練習問題を解く	4.00
教科書の内容を暗記する	3.57
パソコンやタブレットを使って作業をする	3.43
海外で起こった出来事や課題について考える	2.57
学習の成果を発表する	2.57
クラスの同級生から作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける	2.57
自分が取り組んだプロジェクト（探究・調査・実験・発表会）のよかった点や課題を整理する	2.29
図書室を利用して資料や文献を探す	2.14

⑤　学期中の平日（月曜～金曜）放課後の学習時間（1 日あたりの平均）

学期中の平日（月曜～金曜）放課後の学習時間（1 日あたりの平均）は、3 時間強であった【表 2-14】。

【表 2-14】学期中の平日（月曜～金曜）放課後の学習時間（1 日あたりの平均）（n=7）

	1 日あたりの平均時間（分）
1 日あたりの放課後の学習時間	194.3
高校の授業の予習、復習、課題（問題を解くなど）	114.3
塾・予備校の予習、復習、課題（問題を解くなど）	0.0
調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文	51.4
大学受験の準備（過去問を解く、小論文を書くなど）	0.0
資格試験に向けた勉強（英検、TOEIC、漢検など）	11.4

⑥　現在、将来についての考え

選択肢（「5：とてもそう思う」～「1：まったくそう思わない」）に与えられた番号をポイントとみなし、その平均値を算出した【表 2-15】。

【表 2-15】現在、将来についての考え（n=7）

	平均値
学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している	3.57
これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた今の自分の能力に満足している	3.86
高校生活全体に満足している	4.00
将来、学びたい分野について考えている	4.14
将来、行きたい大学について考えている	4.43
将来、やりたい仕事について考えている	4.29

⑦　理系か文系か

71.4%が文系（どちらかというと文系を含めると 85.7%）と回答し、14.3%が理系と回答した。【表 2-15】。

【表 2-15】文系か理系か（n=7）

	%	度数
文系	71.4	5
どちらかというと文系	14.3	1
理系	14.3	1

⑧　高校卒業後の進路

第一希望では、回答者全員が国内の大学への進学を希望していた。

⑨　大学進学時の受験方法

回答者全員が「その他」を希望した（対象校の特性によるためとうかがえる）。

2-7. 今後の計画

今後は、2-4 で示した調査実施計画に基づき、2-5 で示した質問紙を用いて、本調査を進めていく予定である。継続的なデータ収集を行うことで、分析の質を高めていくことを意図している。

また、一定程度の回収データの蓄積が見込める 2021 年 3 月ごろにウェブサイトを開設し、予備調査で得られた結果等も含め、順次公表を行う予定である。

【資料】

資料Ａ：　生徒調査質問紙（高１用）

【高１対象】
※質問１．(2) 学籍番号（生徒番号）の記入については、先生の指示に従ってください。
※とくに説明がない場合、選択肢の中からもっともあてはまる番号に〇をつけてください。

質問１．あなた自身のことをうかがいます。

(1) ____年____組____番

(2) 学籍番号（生徒番号）_____
（※(1)、(2)の欄は今後、追跡調査を行う際に照合するためだけに使用します。）

(3) 性別　　（　　）

(4) 以下の項目の中で、**あなたが経験した学校や教育プログラム**はありますか。あてはまる番号**すべてに**〇をつけてください。

1. インターナショナル・スクール（日本）
2. インターナショナル・スクール（海外）
3. 海外の現地校
4. 海外の日本人学校
5. 国際バカロレア初等教育プログラム（PYP）
6. 国際バカロレア中等教育プログラム（MYP）
7. あてはまるものはない

質問２．あなたは現時点で、以下のことが、**どのくらい身についている**と思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に〇をつけてください。

		身についていない	あまり身についていない	どちらともいえない	やや身についている	身についている
(1)	興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢	1	2	3	4	5
(2)	人間、社会、自然に対する幅広い知識	1	2	3	4	5
(3)	現実の社会問題の仕組みを理解し、解決策を導く力	1	2	3	4	5
(4)	他の人と上手に意思疎通する力	1	2	3	4	5
(5)	自分の良心や社会の規範に沿って行動する力	1	2	3	4	5
(6)	人や社会によって違った考えや文化があることへの理解	1	2	3	4	5
(7)	思いやりの心	1	2	3	4	5
(8)	さまざまなことに挑戦する姿勢	1	2	3	4	5
(9)	グローバルな課題に取り組む姿勢	1	2	3	4	5
(10)	自分の行動を評価し、次に生かす姿勢	1	2	3	4	5
(11)	問題が起きたときに解決する力	1	2	3	4	5
(12)	自ら率先して行動する力	1	2	3	4	5

2

(13) 自分自身で計画立て、それに基づいて実行する力 ----------1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(14) 情報を処理し、活用する力 ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(15) チームで協力して行動する力 ----------1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(16) リーダーシップ ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(17) 「国語(現代文、古典等)」の知識 ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(18) 「社会(歴史、地理、公民等)」の知識 ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(19) 「数学」の知識 ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(20) 「理科(物理、化学、生物、地学等)」の知識 ----------1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(21) 「外国語(英語等)」の知識 ----------1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(22) その他の教科(芸術、体育、専門等)の知識 ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(23) 国際性 ----------1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(24) 総合的な英語力(英会話能力等を含む) ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(25) 志望大学に入学できる学力 ----------1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

質問３．これまでに受けた**高校の授業の中で**、あなたは**次のような活動をした経験**がありますか。

		まったくない	あまりない	たまにある	よくある
(1)	教科書の内容を暗記する	1	2	3	4
(2)	探究したい課題について問いを立てる	1	2	3	4
(3)	プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる	1	2	3	4
(4)	図書室を利用して資料や文献を探す	1	2	3	4
(5)	情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	1	2	3	4
(6)	英語で書かれた情報を収集をする	1	2	3	4
(7)	自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	1	2	3	4
(8)	根拠や理由をもとに議論する	1	2	3	4
(9)	本を一冊読む	1	2	3	4
(10)	グループで協力して活動する	1	2	3	4
(11)	海外で起こった出来事や課題について考える	1	2	3	4
(12)	あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く	1	2	3	4
(13)	パソコンやタブレットを使って作業をする	1	2	3	4
(14)	学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる	1	2	3	4
(15)	学習の成果を発表する	1	2	3	4
(16)	自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会)のよかった点や課題を整理する	1	2	3	4

(17) 問題集の練習問題を解く ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4

(18) 教員から作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける ------ 1 --- 2 --- 3 --- 4

(19) クラスの同級生から作文・エッセイ・発表などへの
フィードバックを受ける ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4

質問４．学期中の**平日**（月曜～金曜）**放課後の学習時間**（＝1 日あたりの平均）と学習内容を教えてください。時間は 10 分や 30 分の単位でおおまかに回答してください。

(1) 1 日あたりの放課後の学習時間： **およそ（　　）時間（　　）分**

(2) 上記の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

①高校の授業の予習、復習、課題（問題を解くなど）	**およそ（　　）時間（　　）分**
②塾・予備校の予習、復習、課題（問題を解くなど）	**およそ（　　）時間（　　）分**
③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文	**およそ（　　）時間（　　）分**
④大学受験の準備（過去問を解く、小論文を書くなど）	**およそ（　　）時間（　　）分**
⑤資格試験に向けた勉強（英検、TOEIC、漢検など）	**およそ（　　）時間（　　）分**

質問５．あなたは、**あなたの現在や将来**についてどのように考えていますか。

	まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	ややそう思う	とてもそう思う
〈学校生活について〉					
(1) 学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している	1	2	3	4	5
(2) これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた今の自分の能力に満足している	1	2	3	4	5
(3) 高校生活全体に満足している	1	2	3	4	5
〈将来について〉					
(1) 将来、学びたい分野について考えている	1	2	3	4	5
(2) 将来、行きたい大学について考えている	1	2	3	4	5
(3) 将来、やりたい仕事について考えている	1	2	3	4	5

※次のページに続きます。

4

質問６．あなたが考える**「国際的視野」**とはどのようなものですか。以下の欄に簡潔に記述してください。

※ 「とくにない」「わからない」場合には、「なし」と記入してください。

質問７．学校での学びを通じたあなた自身の変化や成長について、**もっとも影響を与えたこと**（教科を通じた学び、学習活動、経験・できごとなど）は何ですか。自由に記述してください。

※ 「とくにない」「わからない」場合には、「なし」と記入してください。

質問は以上です。ありがとうございました。

資料Ｂ：　生徒調査質問紙（高２・３用）

【高２・３対象】
※質問１．(2) 学籍番号（生徒番号）の記入については、先生の指示に従ってください。
※とくに説明がない場合、選択肢の中からもっともあてはまる番号に○をつけてください。

質問１．あなた自身のことをうかがいます。

(1) ____年____組____番

(2) 学籍番号（生徒番号）_____
（※(1)、(2)の欄は今後、追跡調査を行う際に照合するためだけに使用します。）

(3) 性別　　（　　）

(4) 以下の項目の中で、**あなたが経験した学校や教育プログラム**はありますか。あてはまる番号**すべてに**○をつけてください。

1. インターナショナル・スクール（日本）
2. インターナショナル・スクール（海外）
3. 海外の現地校
4. 海外の日本人学校
5. 国際バカロレア初等教育プログラム（PYP）
6. 国際バカロレア中等教育プログラム（MYP）
7. あてはまるものはない

質問２．あなたは現時点で、以下のことが、**どのくらい身についている**と思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

		身についていない	あまり身についていない	どちらともいえない	やや身についている	身についている
(1)	興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢	1	2	3	4	5
(2)	人間、社会、自然に対する幅広い知識	1	2	3	4	5
(3)	現実の社会問題の仕組みを理解し、解決策を導く力	1	2	3	4	5
(4)	他の人と上手に意思疎通する力	1	2	3	4	5
(5)	自分の良心や社会の規範に沿って行動する力	1	2	3	4	5
(6)	人や社会によって違った考えや文化があることへの理解	1	2	3	4	5
(7)	思いやりの心	1	2	3	4	5
(8)	さまざまなことに挑戦する姿勢	1	2	3	4	5
(9)	グローバルな課題に取り組む姿勢	1	2	3	4	5
(10)	自分の行動を評価し、次に生かす姿勢	1	2	3	4	5
(11)	問題が起きたときに解決する力	1	2	3	4	5
(12)	自ら率先して行動する力	1	2	3	4	5

2

(13) 自分自身で計画立て、それに基づいて実行する力 ----------1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(14) 情報を処理し、活用する力 ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(15) チームで協力して行動する力 ----------1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(16) リーダーシップ ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(17) 「国語(現代文、古典等)」の知識 ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(18) 「社会(歴史、地理、公民等)」の知識 ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(19) 「数学」の知識 ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(20) 「理科(物理、化学、生物、地学等)」の知識 ----------1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(21) 「外国語(英語等)」の知識 ----------1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(22) その他の教科(芸術、体育、専門等)の知識 ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(23) 国際性 ----------1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(24) 総合的な英語力(英会話能力等を含む) ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(25) 志望大学に入学できる学力 ----------1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

質問３．これまでに受けた**高校の授業の中で**、あなたは**次のような活動をした経験**がありますか。

		まったくない	あまりない	たまにある	よくある
(1)	教科書の内容を暗記する	1	2	3	4
(2)	探究したい課題について問いを立てる	1	2	3	4
(3)	プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる	1	2	3	4
(4)	図書室を利用して資料や文献を探す	1	2	3	4
(5)	情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	1	2	3	4
(6)	英語で書かれた情報を収集をする	1	2	3	4
(7)	自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	1	2	3	4
(8)	根拠や理由をもとに議論する	1	2	3	4
(9)	本を一冊読む	1	2	3	4
(10)	グループで協力して活動する	1	2	3	4
(11)	海外で起こった出来事や課題について考える	1	2	3	4
(12)	あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く	1	2	3	4
(13)	パソコンやタブレットを使って作業をする	1	2	3	4
(14)	学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる	1	2	3	4
(15)	学習の成果を発表する	1	2	3	4
(16)	自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会)のよかった点や課題を整理する	1	2	3	4

(17) 問題集の練習問題を解く ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4

(18) 教員から作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける ------ 1 --- 2 --- 3 --- 4

(19) クラスの同級生から作文・エッセイ・発表などへの
フィードバックを受ける ---------- 1 --- 2 --- 3 --- 4

質問４．学期中の**平日**（月曜～金曜）**放課後の学習時間**（＝1 日あたりの平均）と学習内容を教えてください。時間は 10 分や 30 分の単位でおおまかに回答してください。

(1) 1 日あたりの放課後の学習時間： **およそ（　　）時間（　　）分**

(2) 上記の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

①高校の授業の予習、復習、課題（問題を解くなど）	**およそ（　　）時間（　　）分**
②塾・予備校の予習、復習、課題（問題を解くなど）	**およそ（　　）時間（　　）分**
③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文	**およそ（　　）時間（　　）分**
④大学受験の準備（過去問を解く、小論文を書くなど）	**およそ（　　）時間（　　）分**
⑤資格試験に向けた勉強（英検、TOEIC、漢検など）	**およそ（　　）時間（　　）分**

質問５．あなたは、**あなたの現在や将来**についてどのように考えていますか。

	まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	ややそう思う	とてもそう思う
〈学校生活について〉					
(1) 学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している	1	2	3	4	5
(2) これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた今の自分の能力に満足している	1	2	3	4	5
(3) 高校生活全体に満足している	1	2	3	4	5
〈将来について〉					
(1) 将来、学びたい分野について考えている	1	2	3	4	5
(2) 将来、行きたい大学について考えている	1	2	3	4	5
(3) 将来、やりたい仕事について考えている	1	2	3	4	5

質問６．あなたは**理系（医歯薬含む）ですか、文系ですか**。

1. 理系
2. 文系
3. 理系・文系両方
4. どちらかといえば理系
5. どちらかといえば文系
6. まだ決めていない

資料Ｃ：　集計表

生徒のみなさんへの質問アンケート

区分	全体集計	回答者数	23

質問1．あなたご自身のことをおうかがいします。

(1)性別

選択肢	件数	割合
1.男	5	21.7%
2.女	18	78.3%
合計	23	100.0%

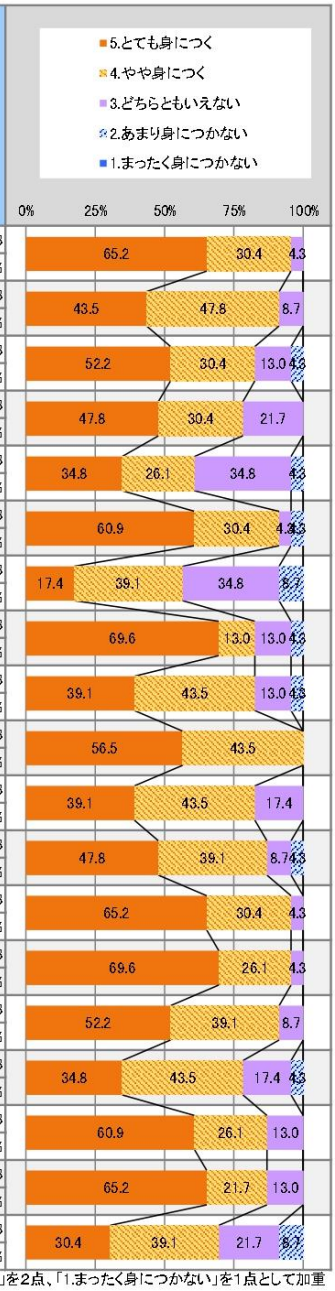
(3) これまでに経験したことのある学校や教育プログラムを下記から選んでください。（複数回答可）

選択肢	件数	割合	0% 20% 40% 60% 80% 100%
1. 日本の公立学校	21	91.3%	91.3
2. 日本の私立学校	2	8.7%	8.7
3. インターナショナル・スクール（日本）	6	26.1%	26.1
4. インターナショナル・スクール（海外）	1	4.3%	4.3
5. 海外の現地校	10	43.5%	43.5
6. 海外の日本人学校（補習校含む）	4	17.4%	17.4
7. 国際バカロレア初等教育プログラム（PYP）	0	0.0%	
8. 国際バカロレア中等教育プログラム（MYP）	2	8.7%	8.7
8. その他	3	13.0%	13.0
回答者数	23	－	

生徒のみなさんへの質問アンケート

質問2. あなたは国際バカロレアディプロマプログラム（DP）では、どんな力が身につくと思いますか。

項目	平均	肯定回答率（⑤+④）	否定回答率（①+②）	選択肢	5.とても身につく	4.やや身につく	3.どちらともいえない	2.あまり身につかない	1.まったく身につかない	合計
(1) 興味のある対象について深く勉強し、理解すること	4.65	95.7%	0.0%	件数	15	7	1	0	0	23
				割合	65.2%	30.4%	4.3%	0.0%	0.0%	100.0%
(2) 人間、社会、自然についてさまざまな知識を得ること	4.39	91.3%	0.0%	件数	10	11	2	0	0	23
				割合	43.5%	47.8%	8.7%	0.0%	0.0%	100.0%
(3) 現実の社会問題の仕組みを理解し、解決策を導けるようになること	4.35	82.6%	4.3%	件数	12	7	3	1	0	23
				割合	52.2%	30.4%	13.0%	4.3%	0.0%	100.0%
(4) 他の人と上手に意思疎通できるようになること	4.30	78.3%	0.0%	件数	11	7	5	0	0	23
				割合	47.8%	30.4%	21.7%	0.0%	0.0%	100.0%
(5) 自分の良心や社会の規範に沿った行動を身に付けること	3.96	60.9%	4.3%	件数	8	6	8	1	0	23
				割合	34.8%	26.1%	34.8%	4.3%	0.0%	100.0%
(6) 人や社会によって違った考えや文化があることを理解すること	4.52	91.3%	4.3%	件数	14	7	1	1	0	23
				割合	60.9%	30.4%	4.3%	4.3%	0.0%	100.0%
(7) 思いやりの心を持つこと	3.70	56.5%	8.7%	件数	4	9	8	2	0	23
				割合	17.4%	39.1%	34.8%	8.7%	0.0%	100.0%
(8) さまざまなことに挑戦する姿勢を身に付けること	4.52	82.6%	4.3%	件数	16	3	3	1	0	23
				割合	69.6%	13.0%	13.0%	4.3%	0.0%	100.0%
(9) 自分の能力を効果的に使えるようになること	4.22	82.6%	4.3%	件数	9	10	3	1	0	23
				割合	39.1%	43.5%	13.0%	4.3%	0.0%	100.0%
(10) 自分の行動を評価し、次に生かす姿勢を身に付けること	4.61	100.0%	0.0%	件数	13	10	0	0	0	23
				割合	56.5%	43.5%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
(11) 問題が起きたときに解決する力を身に付けること	4.26	82.6%	0.0%	件数	9	10	4	0	0	23
				割合	39.1%	43.5%	17.4%	0.0%	0.0%	100.0%
(12) 自ら率先して行動する力を身に付けること	4.35	87.0%	4.3%	件数	11	9	2	1	0	23
				割合	47.8%	39.1%	8.7%	4.3%	0.0%	100.0%
(13) 自らを自分自身で管理する力を身に付けること	4.65	95.7%	0.0%	件数	15	7	1	0	0	23
				割合	65.2%	30.4%	4.3%	0.0%	0.0%	100.0%
(14) 情報を処理し、活用する能力を身に付けること	4.70	95.7%	0.0%	件数	16	6	1	0	0	23
				割合	69.6%	26.1%	4.3%	0.0%	0.0%	100.0%
(15) チームで協力して行動する力を身に付けること	4.48	91.3%	0.0%	件数	12	9	2	0	0	23
				割合	52.2%	39.1%	8.7%	0.0%	0.0%	100.0%
(16) リーダーシップを身に付けること	4.13	78.3%	4.3%	件数	8	10	4	1	0	23
				割合	34.8%	43.5%	17.4%	4.3%	0.0%	100.0%
(17) 国際性を身に付けること	4.52	87.0%	0.0%	件数	14	6	3	0	0	23
				割合	60.9%	26.1%	13.0%	0.0%	0.0%	100.0%
(18) 総合的な英語力（英会話能力等を含む）を身に付けること	4.57	87.0%	0.0%	件数	15	5	3	0	0	23
				割合	65.2%	21.7%	13.0%	0.0%	0.0%	100.0%
(19) 志望大学に入学できる学力を身に付けること	3.96	69.6%	8.7%	件数	7	9	5	2	0	23
				割合	30.4%	39.1%	21.7%	8.7%	0.0%	100.0%

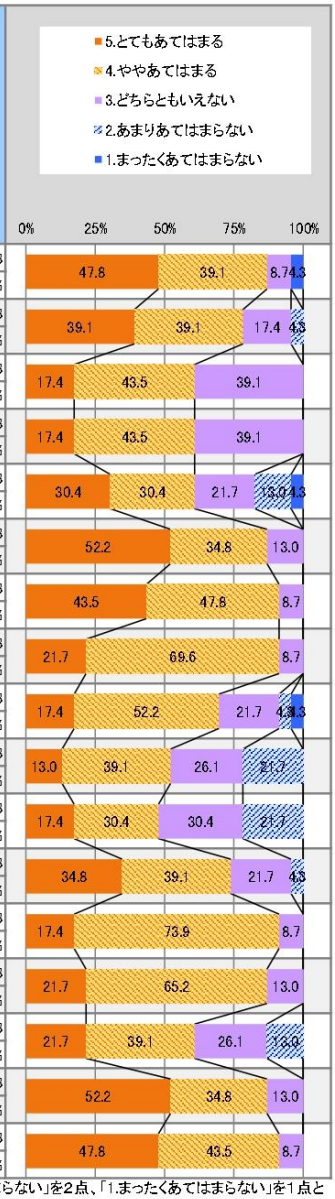


平均：「5.とても身につく」を5点、「4.やや身につく」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身につかない」を2点、「1.まったく身につかない」を1点として加重平均

生徒のみなさんへの質問アンケート

質問3. あなたは国際バカロレアディプロマプログラム（DP）を通じて、実際にどんなことができるようになりましたか。

項目	平均	肯定回答率（⑤+④）	否定回答率（①+②）	選択肢	5.とてもあてはまる	4.ややあてはまる	3.どちらともいえない	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合計
(1) 知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする	4.30	87.0%	4.3%	件数	11	9	2	0	1	23
				割合	47.8%	39.1%	8.7%	0.0%	4.3%	100.0%
(2) 自分はどういう人間かを考えることがよくある	4.17	78.3%	4.3%	件数	9	9	4	1	0	23
				割合	39.1%	39.1%	17.4%	4.3%	0.0%	100.0%
(3) 社会のことをよく勉強している	3.83	60.9%	0.0%	件数	4	10	9	0	0	23
				割合	17.4%	43.5%	39.1%	0.0%	0.0%	100.0%
(4) 自然や環境のことをよく勉強している	3.83	60.9%	0.0%	件数	4	10	9	0	0	23
				割合	17.4%	43.5%	39.1%	0.0%	0.0%	100.0%
(5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができている	3.74	60.9%	17.4%	件数	7	7	5	3	1	23
				割合	30.4%	30.4%	21.7%	13.0%	4.3%	100.0%
(6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする	4.43	87.0%	0.0%	件数	12	8	3	0	0	23
				割合	52.2%	34.8%	13.0%	0.0%	0.0%	100.0%
(7) 問題を解決するために自分ができることを考える	4.39	91.3%	0.0%	件数	10	11	2	0	0	23
				割合	43.5%	47.8%	8.7%	0.0%	0.0%	100.0%
(8) 課題があれば自分で解決しようとする	4.17	91.3%	0.0%	件数	5	16	2	0	0	23
				割合	21.7%	69.6%	8.7%	0.0%	0.0%	100.0%
(9) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができている	3.78	69.6%	8.7%	件数	4	12	5	1	1	23
				割合	17.4%	52.2%	21.7%	4.3%	4.3%	100.0%
(10) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができている	3.48	52.2%	21.7%	件数	3	9	6	5	0	23
				割合	13.0%	39.1%	26.1%	21.7%	0.0%	100.0%
(11) 何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある	3.48	47.8%	21.7%	件数	4	7	7	5	0	23
				割合	17.4%	30.4%	30.4%	21.7%	0.0%	100.0%
(12) 他の人たちと協力してチームで行動することができる	4.09	73.9%	4.3%	件数	8	9	5	1	0	23
				割合	34.8%	39.1%	21.7%	4.3%	0.0%	100.0%
(13) チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている	4.13	91.3%	0.0%	件数	4	17	2	0	0	23
				割合	17.4%	73.9%	8.7%	0.0%	0.0%	100.0%
(14) 自ら目標を設定し、その達成のために行動することができている	4.13	87.0%	0.0%	件数	5	15	3	0	0	23
				割合	21.7%	65.2%	13.0%	0.0%	0.0%	100.0%
(15) グループの目的を示し、グループの人たちを効果的に行動させることができる	3.74	60.9%	13.0%	件数	5	9	6	3	0	23
				割合	21.7%	39.1%	26.1%	13.0%	0.0%	100.0%
(16) 学校や社会の規則を守っている	4.43	87.0%	0.0%	件数	12	8	3	0	0	23
				割合	52.2%	34.8%	13.0%	0.0%	0.0%	100.0%
(17) 自分の良心や従うべきルールを持ち、それに基づいて行動している	4.43	91.3%	0.0%	件数	11	10	2	0	0	23
				割合	47.8%	43.5%	8.7%	0.0%	0.0%	100.0%

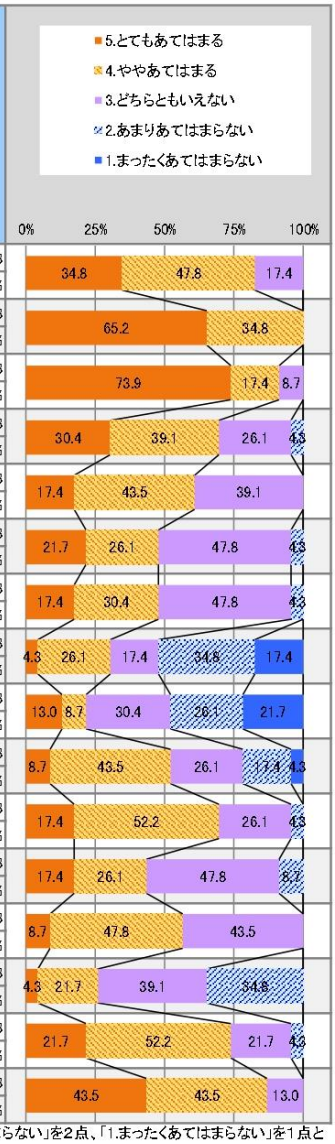


平均：「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

生徒のみなさんへの質問アンケート

質問3. あなたは国際バカロレアディプロマプログラム（DP）を通じて、実際にどんなことができるようになりましたか。

項目	平均	肯定回答率（⑤+④）	否定回答率（①+②）	選択肢	5.とてもあてはまる	4.ややあてはまる	3.どちらともいえない	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合計
(18) 自分の行動に責任をとることができる	4.22	82.6%	0.0%	件数	8	11	4	0	0	23
				割合	34.8%	47.8%	17.4%	0.0%	0.0%	100.0%
(19) 他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している	4.70	100.0%	0.0%	件数	15	8	0	0	0	23
				割合	65.2%	34.8%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
(20) 世の中には色々な価値観や文化があることを理解している	4.70	91.3%	0.0%	件数	17	4	2	0	0	23
				割合	73.9%	17.4%	8.7%	0.0%	0.0%	100.0%
(21) 困っている人を助けることがよくある	4.00	69.6%	4.3%	件数	7	9	6	1	0	23
				割合	30.4%	39.1%	26.1%	4.3%	0.0%	100.0%
(22) いつも新しいことに挑戦している	3.83	60.9%	0.0%	件数	4	10	9	0	0	23
				割合	17.4%	43.5%	39.1%	0.0%	0.0%	100.0%
(23) いつも何か新しいことを生み出そうとしている	3.70	47.8%	4.3%	件数	5	6	11	1	0	23
				割合	21.7%	26.1%	47.8%	4.3%	0.0%	100.0%
(24) 自分の能力を有効に使うことができている	3.65	47.8%	4.3%	件数	4	7	11	1	0	23
				割合	17.4%	30.4%	47.8%	4.3%	0.0%	100.0%
(25) 健康的な生活に注意している	2.70	30.4%	52.2%	件数	1	6	4	8	4	23
				割合	4.3%	26.1%	17.4%	34.8%	17.4%	100.0%
(26) 体力・身体つくりをしている	2.70	21.7%	47.8%	件数	3	2	7	6	5	23
				割合	13.0%	8.7%	30.4%	26.1%	21.7%	100.0%
(27) 自分で計画を立て、それに従って物事を進めることができている	3.39	52.2%	21.7%	件数	2	10	6	4	1	23
				割合	8.7%	43.5%	26.1%	17.4%	4.3%	100.0%
(28) 社会や学校の一員としての義務と権利を認識している	3.87	69.6%	4.3%	件数	4	12	6	1	0	23
				割合	17.4%	52.2%	26.1%	4.3%	0.0%	100.0%
(29) 社会、学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている	3.57	43.5%	8.7%	件数	4	6	11	2	0	23
				割合	17.4%	26.1%	47.8%	8.7%	0.0%	100.0%
(30) 自分の周りに変化が起きてもうまく適応できている	3.70	56.5%	0.0%	件数	2	11	10	0	0	23
				割合	8.7%	47.8%	43.5%	0.0%	0.0%	100.0%
(31) ストレスを感じることがあってもリラックスして前向きにとらえることができている	3.00	26.1%	34.8%	件数	1	5	9	8	0	23
				割合	4.3%	21.7%	39.1%	34.8%	0.0%	100.0%
(32) 自分の態度や行動の正しさを確認することがよくある	3.96	73.9%	4.3%	件数	5	12	5	1	0	23
				割合	21.7%	52.2%	21.7%	4.3%	0.0%	100.0%
(33) 自分の態度や行動をよりよいものにしようと努力している	4.35	87.0%	0.0%	件数	10	10	3	0	0	23
				割合	43.5%	43.5%	13.0%	0.0%	0.0%	100.0%

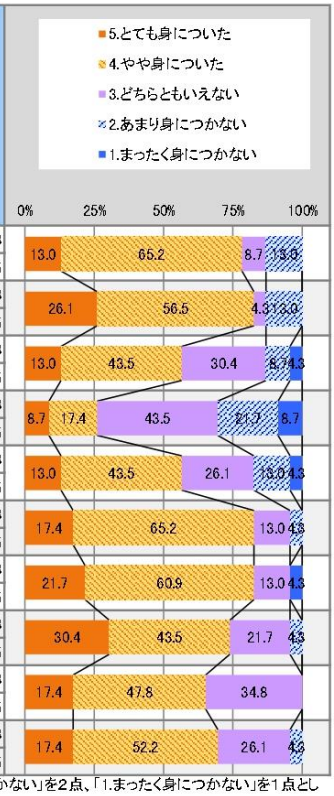


平均：「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

生徒のみなさんへの質問アンケート

質問4. あなたは国際バカロレア「学習の方法（ATLスキル）」をどの程度身につけましたか。

項目	平均	肯定回答率（⑤+④）	否定回答率（①+②）	選択肢	5.とても身についた	4.やや身についた	3.どちらともいえない	2.あまり身につかない	1.まったく身につかない	合計
(1) 相互作用を通して思考やメッセージ、情報を効果的にやりとりする	3.83	78.3%	13.0%	件数	3	15	2	3	0	23
				割合	13.0%	65.2%	8.7%	13.0%	0.0%	100.0%
(2) 他者とともに効果的に取り組む	4.00	82.6%	13.0%	件数	6	13	1	3	0	23
				割合	26.1%	56.5%	4.3%	13.0%	0.0%	100.0%
(3) 時間と課題を効果的に管理する	3.57	56.5%	13.0%	件数	3	10	7	2	1	23
				割合	13.0%	43.5%	30.4%	8.7%	4.3%	100.0%
(4) 心理状態の管理	3.00	26.1%	30.4%	件数	2	4	10	5	2	23
				割合	8.7%	17.4%	43.5%	21.7%	8.7%	100.0%
(5) 学習プロセスを（再）検討する、ATLスキルを選択し用いる	3.52	56.5%	17.4%	件数	3	10	6	3	1	23
				割合	13.0%	43.5%	26.1%	13.0%	4.3%	100.0%
(6) 情報を見つけ、解釈し、判断し、創造する	4.00	82.6%	4.3%	件数	4	15	3	1	0	23
				割合	17.4%	65.2%	13.0%	4.3%	0.0%	100.0%
(7) 考えや情報を用い、創造するためにメディアと付き合う	4.00	82.6%	4.3%	件数	5	14	3	0	1	23
				割合	21.7%	60.9%	13.0%	0.0%	4.3%	100.0%
(8) 論点や考えを分析し、評価する	4.04	73.9%	4.3%	件数	7	10	5	1	0	23
				割合	30.4%	43.5%	21.7%	4.3%	0.0%	100.0%
(9) 今までにないアイディアを生み出し、新しいものの見方を検討する	3.87	65.2%	0.0%	件数	4	11	8	0	0	23
				割合	17.4%	47.8%	34.8%	0.0%	0.0%	100.0%
(10) スキルと知識を多角的な文脈において用いる	3.87	69.6%	4.3%	件数	4	12	6	1	0	23
				割合	17.4%	52.2%	26.1%	4.3%	0.0%	100.0%

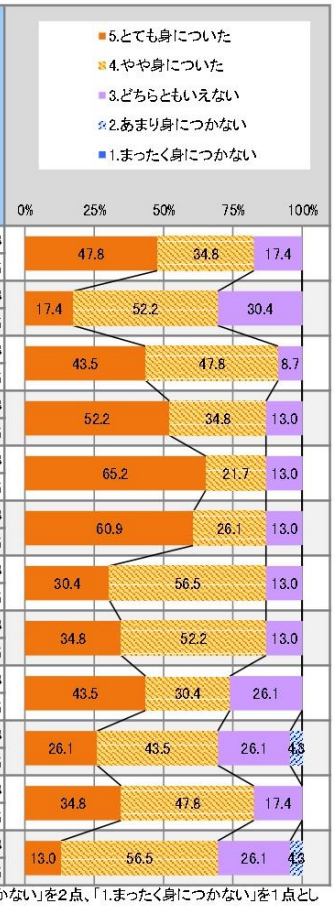


平均：「5.とても身についた」を5点、「4.やや身についた」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身につかない」を2点、「1.まったく身につかない」を1点として加重平均

生徒のみなさんへの質問アンケート

質問5. あなたは国際バカロレア「知の理論（TOK）」を通じて、以下の態度をどの程度身につけましたか。

項目	平均	肯定回答率（⑤+④）	否定回答率（①+②）	選択肢	5.とても身についた	4.やや身についた	3.どちらともいえない	2.あまり身につかない	1.まったく身につかない	合計
(1) 話し合いの前提や言葉の定義を正しく理解して考えようとする	4.35	82.6%	0.0%	件数	11	8	4	0	0	23
				割合	47.8%	34.8%	17.4%	0.0%	0.0%	100.0%
(2)誰でもわかるように論理的に説明しようとする	3.91	69.6%	0.0%	件数	4	12	7	0	0	23
				割合	17.4%	52.2%	30.4%	0.0%	0.0%	100.0%
(3) 他の人の考えを自分の言葉でまとめてみる	4.39	91.3%	0.0%	件数	10	11	2	0	0	23
				割合	43.5%	47.8%	8.7%	0.0%	0.0%	100.0%
(4) いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい	4.43	87.0%	0.0%	件数	12	8	3	0	0	23
				割合	52.2%	34.8%	13.0%	0.0%	0.0%	100.0%
(5) ずっと新しいことを学び続けていきたいと思う	4.57	87.0%	0.0%	件数	15	5	3	0	0	23
				割合	65.2%	21.7%	13.0%	0.0%	0.0%	100.0%
(6) さまざまな文化について学びたいと思う	4.52	87.0%	0.0%	件数	14	6	3	0	0	23
				割合	60.9%	26.1%	13.0%	0.0%	0.0%	100.0%
(7) いつも偏りのないように判断をしようとする	4.22	87.0%	0.0%	件数	7	13	3	0	0	23
				割合	30.4%	56.5%	13.0%	0.0%	0.0%	100.0%
(8) 物事を決めるときには、客観的に決めようとする	4.26	87.0%	0.0%	件数	8	12	3	0	0	23
				割合	34.8%	52.2%	13.0%	0.0%	0.0%	100.0%
(9) 一つ二つの立場だけではなく、できるだけ多くの立場から考えようとする	4.22	73.9%	0.0%	件数	10	7	6	0	0	23
				割合	43.5%	30.4%	26.1%	0.0%	0.0%	100.0%
(10) 決定をするときには，確かな証拠があるかどうかを注意深く考える	3.96	69.6%	4.3%	件数	6	10	6	1	0	23
				割合	26.1%	43.5%	26.1%	4.3%	0.0%	100.0%
(11) 判断をするときには，できるだけ多くの事実や証拠を調べる	4.22	82.6%	0.0%	件数	8	11	4	0	0	23
				割合	34.8%	47.8%	17.4%	0.0%	0.0%	100.0%
(12) 行動をとるときは、はっきりとした根拠に基づくようにしている	3.83	69.6%	4.3%	件数	3	13	6	1	0	23
				割合	13.0%	56.5%	26.1%	4.3%	0.0%	100.0%

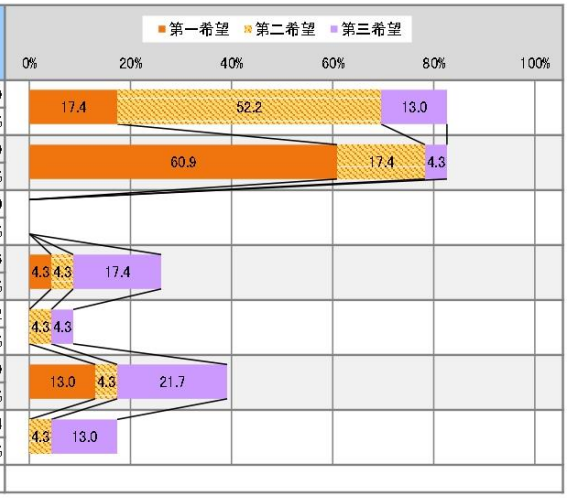


平均：「5.とても身についた」を5点、「4.やや身についた」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身につかない」を2点、「1.まったく身につかない」を1点として加重平均

生徒のみなさんへの質問アンケート

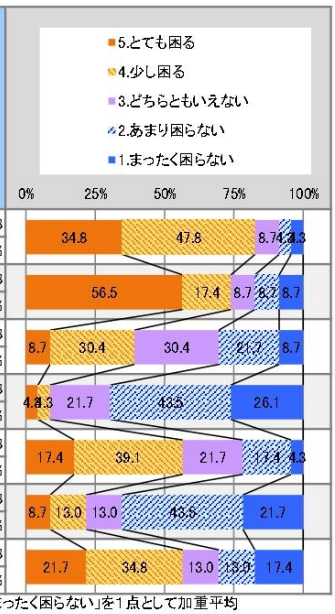
質問6. あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。(3つ選択)

選択肢	選択肢	第一希望	第二希望	第三希望	合計
1. 国内の大学に進学する	件数	4	12	3	19
	割合	17.4%	52.2%	13.0%	82.6%
2. 海外の大学に進学する	件数	14	4	1	19
	割合	60.9%	17.4%	4.3%	82.6%
3. 短期大学に進学する	件数	0	0	0	0
	割合	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
4. 専門学校に進学する	件数	1	1	4	6
	割合	4.3%	4.3%	17.4%	26.1%
5. 就職する	件数	0	1	1	2
	割合	0.0%	4.3%	4.3%	8.7%
6. わからない	件数	3	1	5	9
	割合	13.0%	4.3%	21.7%	39.1%
7. その他	件数	0	1	3	4
	割合	0.0%	4.3%	13.0%	17.4%
回答者数		23			



質問7. 国際バカロレアディプロマプログラム(DP)で学ぶ上で、もしも以下のようなことが起きたとしたら、あなたはどのくらい困りますか。

項目	平均	肯定回答率(⑤+④)	否定回答率(①+②)	選択肢	5.とても困る	4.少し困る	3.どちらともいえない	2.あまり困らない	1.まったく困らない	合計
(1) 授業料や学費が高くなる	4.09	82.6%	8.7%	件数	8	11	2	1	1	23
				割合	34.8%	47.8%	8.7%	4.3%	4.3%	100.0%
(2) 宿題が多くなる	4.09	73.9%	17.4%	件数	13	4	2	2	2	23
				割合	56.5%	17.4%	8.7%	8.7%	8.7%	100.0%
(3) 大学の一般受験とは直接つながらない内容を学ぶようになる	3.13	39.1%	30.4%	件数	2	7	7	5	2	23
				割合	8.7%	30.4%	30.4%	21.7%	8.7%	100.0%
(4) 友達と違うプログラムで学ぶようになる	2.22	8.7%	69.6%	件数	1	1	5	10	6	23
				割合	4.3%	4.3%	21.7%	43.5%	26.1%	100.0%
(5) 課外活動や部活動に十分に参加できなくなる	3.52	56.5%	21.7%	件数	4	9	5	4	1	23
				割合	17.4%	39.1%	21.7%	17.4%	4.3%	100.0%
(6) 一部の授業で先生が使う言葉が日本語ではなく英語になる	2.48	21.7%	65.2%	件数	2	3	3	10	5	23
				割合	8.7%	13.0%	13.0%	43.5%	21.7%	100.0%
(7) 全ての授業で先生が使う言葉が日本語ではなく英語になる	3.35	56.5%	30.4%	件数	5	8	3	3	4	23
				割合	21.7%	34.8%	13.0%	13.0%	17.4%	100.0%



平均:「5.とても困る」を5点、「4.少し困る」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり困らない」を2点、「1.まったく困らない」を1点として加重平均

第 3 章　定性研究の概要

3-1. 研究の概要

本研究は、IB の教育効果を実証的に析出することにより、国内における IB 教育の普及、ならびに「主体的・対話的で深い学び」を実現するための事例の蓄積・促進に寄与することを目的とする。

1980 年代以降、世界中で従来の「学力」の範疇に収まらない、いわゆる「新しい能力」が教育目標に掲げられるようになった（松下 2010）。日本では、2013 年以降、IB の普及・拡大が図られているが、その背景には、IB が従来の「学力」試験では測り切れない能力育成を志向した教育プログラムであり、IB を活用して日本の教育政策に対する示唆を得るという目的が存在した。しかしながら、日本では IB 認定校が徐々に増加しているものの、IB 教育の効果を実証的に問う研究や、なぜ IB 教育の効果がもたらされるかを明らかにした研究はわずかである。

そこで、本研究では、IB カリキュラムのどの側面（科目・要件）、あるいは IB 教育が採用しているいかなる教育方法によって、生徒は、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体的に学習に取り組む態度（学びに向かう力）を育んでいると考えるかを質的分析により明らかにする。

3-2. 先行研究の検討

IB 教育の効果を検証する先行研究に Yamamoto *et al.* (2016)が挙げられる。この研究は、IBDP プログラムの評価を検討するための調査として実施され、IBDP を経験した生徒と日本のカリキュラムのみを経験した生徒の比較を行なっている。ここでは IBDP を経験した生徒が、「より国際的な心をもつ」、「英語でオールラウンドな習熟度を身につける」、「問題解決する能力を身につける」、「リーダーシップスキルを身につける」、「自分で行動する能力を身につける」、「多くの異なる文化について学習する」、「様々なアイデアを持つ他の人と協力して学習する」と回答する事例を挙げ、IB を学ぶことによる多様なスキルの獲得について主に定量的な分析の視点から論じている。また、DP の教育課程については、「批判的思考スキル」、「問題を特定して調査する能力を含む学習者の自律性」、「国際的な意識を育む」とし、文部科学省のカリキュラムと親和性が高いことが述べられている。また渋谷（2020）は、IB を学ぶ生徒への聞き取り調査から、生徒の習得したコンピテンシーついて調査を行ない、「教科の力を応用する力やアカデミックスキル」、「批判的な思考力、多角的な判断力、表現力」、「主体的に学ぶ態度や多様な文化的背景を理解する力」が習得できると語った事例を挙げ、OECD や文部科学省など現代社会が求める〈新しい能力〉に対応すると述べている。このように、先行研究では IB の学びを通して生徒が習得した能力について明らかになってきており、学習指導要領（平成 29・30 年告示）との繋がりについても対応があることがいえる。

3-3. 調査方法

そこで、本年度は、以下のメンバーによって定性研究班を構成することとなった。

花井　渉（大学入試センター 助教）：全体統括
赤塚　祐哉（早稲田大学情報教育研究所 研究所員）
井上　志音（灘中・高等学校）
木村 光宏（神奈川県立横浜国際高等学校／早稲田大学）
渋谷　真樹（日本赤十字看護大学 教授）
御手洗　明佳（淑徳大学 准教授）
菅井　篤（開智望小学校 教諭／筑波大学 研究員）
伊藤　健策（筑波大学大学院）
田中　佳太（筑波大学大学院）

本研究では、IB 教員の視点から、どのような教育手法が生徒の③主体的に学習に取り組む態度等を育んでいるかを質的アプローチにより考察することを目的としている。そこで来年度より本格的に実施するインタビュー調査の前に、昨年度（2019 年度）に実施した IB 教員に対するフォーカス・グループ・インタビューの分析を行ない、本研究におけるインタビュー項目の再検討を行なうための検討事項や問題点を明らかにした。昨年度の調査では、計 4 校の IB 認定校を対象にしているが、以下の分析ではその中から 1 校を抽出し、分析を試みた。そのため、以下の分析は、あくまでも予備的な調査分析として位置づくものであり、ある程度の特徴が示唆されるものの、本研究のインタビュー項目を設定する際の一つの参考となる分析結果である点に留意していただきたい。

1）調査対象・実施時期

本予備調査は、関東地方の国際バカロレア認定校の A 高等学校で、2019 年 12 月に実施された。A 高等学校では国際バカロレアコースを 2019 年より設置し、DP に関連する科目については国際バカロレアの手法で三年間の授業が実施されている。ディプロマの開始は 2020 年 1 月であるが、IB のカリキュラムを学び、指導方法を実践していることから、IB の特徴だけでなく日本のカリキュラムとの違いに関する意見も期待できると考えた。インタビューは IB カリキュラムで日本語、英語、化学、数学及び芸術を教える教員 5 を対象に実施した。5 名の教員決定の理由は、IB のカリキュラム以外での授業経験があり、IB のカリキュラムに関してもアウトライン（指導計画）を作成し、実際にプレ DP プログラムから指導の経験があることから、日本の教育と IB の教育の両方について語ることができると考えたためである。また、IB 教員の「生の声」に基づく情報が何より必要であることから、DP コーディネーターや管理職は同席しない形で実施した。

2）データ収集の方法と質問の形式

質的研究において、データを収集する方法として、面接法、観察法が知られており、それぞれの方法については以下の通り分類できる。

【表 3-1】質的研究におけるデータ収集法

面接法：口頭データの収集	
個人面接	調査者と回答者が１対１で対面して聴取を行う
集団面接	フォーカス・グループ 共通する問題を抱える対象を一度に複数名集めて聴取を行う ブレインストーミング 複数の対象者が一度に集められ、他の意見を批判せずに、共通するテーマについて自由に意見を出し合う
観察法：視覚データの収集	
参与観察	観察者がフィールドへ参与し、同一化することを通してフィールドの内部の知識を獲得する
非参与観察	観察者がフィールドの一部として関与しない
間接的観察	写真や映像を用いた間接的観察

鈴木（2005）より筆者作成

面接法によるデータ収集の利点は、顔が見えることで、回答者の疑問にその場で答えることができ、面接の状況や回答者の表情・動作などからより踏み込んだ質問をすることができることが挙げられる。個人面接の場合は回答者のプライバシーの配慮ができ、集団面接の場合は複数の回答者に対して聞き取りを行うもので、回答者はリラックスでき、追随するまたは反対する意見など発言を引き出しやすくなるという利点がある（寺下、2011）。

次に質問の形式について、構造化面接。半構造化面接、非構造化面接があり、以下のように分類できる。

【表 3-2】面接における質問の構造

構造化面接	質問の内容、順序、回答方法が完全に決定されており、標準化されたデータを聴取することができる
半構造化面接	大まかな方向性を決めたインタビューガイドに従って質問が行われ、対話の流れに合わせて質問を変化させることができ、柔軟にその意見を聞き取ることが可能となる
非構造化面接	質問内容が決められておらず、自然な会話などのなかから問題点を探っていくことができる

鈴木（2005）より筆者作成

本予備調査では、IB の授業を担当する教員 5 名に対し、フォーカス・グループ・インタビューによる半構造化面接を実施することとした。この手法により同僚との会話となることから安心して自由に発言できることと同時に、校内でも他の実践や考えについて触れることができ、教員研修（プロフェッショナル・ディベロップメント）の観点でも有効であると考えられる。インタビュー実施の際にインタビューガイドを作成し、事前にインタビュー

ガイドの質問項目を知らせた上で約 40 分のインタビューを実施し、IC レコーダーで記録した。

面接中は教員の回答に応じて発展的な質問を行なったり、質問の順番を変えたりするなど柔軟に対応した。

3-4. 分析方法

本予備調査では、教員の語りから生徒の学びに関する特徴を見出すため、フォーカス・グループ・インタビューを採用した。探索的な分析となることから、体系的な語りのカテゴリー化によりインタビューの全体像を提示することができるグラウンデッド・セオリー・アプローチを採用する。また、グラウンデッド・セオリー・アプローチにはいくつか型があるが（Glaser & Strauss、 1967; 木下、 2007; 戈木、 2008; Strauss & Corbin、 1990)、手順が分かりやすく、研究結果の現場への応用もしやすいことから、木下（2007）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を用いた。M-GTA では分析の過程で、データから生成するカテゴリーが洗練され、カテゴリーが出揃い、カテゴリー同士の関連があきらかになった段階で、現象モデルの生成が可能となる。この現象モデルから、教員の捉える生徒の学びや IB 教育の状況を体系的に示すことができると考えた。また、インタビュー結果を体系的に示すために角南（2013）の仮説モデル生成の手法にならい、KJ 法による図式化を行なった。

本予備調査では、膨大な文字データの中で、何度も繰り返される定性的コーディングによるテキストの比較や分類を補助するため、MAXQDA ソフトを使用した。MAXQDA の中心的な作業は注目するデータにコードをふるコーディングと、作成したコードの整理である。このソフトを使うことでプロトコルデータのコードとコードが振られたデータ部分、そして元データを常に紐づけして管理することができるため、コードから対応するデータおよびそのデータが元々埋め込まれていた全体のデータを表示することや、コード名がデータの文脈を反映しているかの確認をより簡易的に行うことが可能となる。

分析の具体的な分析手順を以下の表に示す。

【表 3-3】データ分析の具体的手続き（原田、2004 を改変）

STEP	分析	
0	予備的分析	分析視点の整理意識化、プロトコルデータ化、MAXQDA で読み込み
1	概念化	教員の関わりを意味のまとまりで区切り、抽象的な概念へと変換
2	カテゴリー生成	前ステップを踏まえ、概念からカテゴリーへと統合
3	カテゴリー化確認	分析の途中経過を研究者 1 名に報告し実践場面との適合から分析の見直しを行う
4	概念とカテゴリーの修正	確認作業での相違点を踏まえ、相対的見直しを行う
5	カテゴリーの確認	研究者 1 名によるカテゴリーの最終確認

プロトコルデータをソフトに読み込み、プロトコルデータを意味のまとまりで区切り、意味内容事のデータを抽出した。本調査における教員の語ったプロトコルデータは 13、054 文字で構成され、研究目的に沿って分類していった。そして、それに対応する概念を生成し、類似する概念をまとめながら、カテゴリーの生成を行った。広く共通するカテゴリーについてはコアカテゴリーとし、その他をサブカテゴリーとしている。分析の途中で、新たな概念が生成される可能性があった場合には、これまでの概念との関係性を再度吟味し、カテゴリーとの関係を改めて確認していった。カテゴリーの対応確認のために、研究者 1 名（花井）と 2 回の確認作業を行なった。以下、文中の《 》はコアカテゴリー、〈 〉はサブカテゴリー、［ ］は概念、「 」はインタビューデータを表している。

【表 3-4】データ分析の例

プロトコルデータ	
ちょっと観点変わるかもしれないですけど、やっぱり日本の教育と IB の教育比べたときに、人数が少ないので圧倒的に IB のほうが。 だからこそできるプログラムなのかなっていうのはすごく感じます。 一つの、一人とか、一つの物事に対する時間のかけ方っていうものは、日本の教育、今 40 人 1 クラスで、この限られたコマ数でって中では結構厳しいので、そこは大きな違いなのかなっていうふうに感じますね。教員が生徒に関わる時間とか、フィードバックする時間も含めたら、やっぱりこの人数じゃないとできない教育なんだろうなっていうのは感じています。 （フォーカス・グループ・インタビュー、 71 文目より抜粋）	・IB の学習環境 ・日本の教育と IB 教育の違い ・日本の学習環境 ・IB の学習環境

3-5. 結果と考察

1）M-GTA によるカテゴリーと概念の抽出

分析の結果、カテゴリーの生成過程を通じて、《IB の教育の性質》、《日本の教育の性質》、《日本の教育と IB 教育の比較》の３つのコアカテゴリーが抽出された。これらの３つのコアカテゴリーから 14 のサブカテゴリーが抽出された。《IB 教育の性質》からは〈成果〉、〈今後の指導〉、〈指導の実際〉、〈カリキュラムの特徴〉、〈感情〉が抽出された。《日本の教育の性質》からは〈日本の学習環境〉、〈従来の指導〉が抽出された。《日本の教育と IB 教育の比較》からは、〈日本と IB の違い〉、〈日本と IB の類似性〉が抽出された。カテゴリーとそれに関連する概念および概念の内容を次の表に示す。

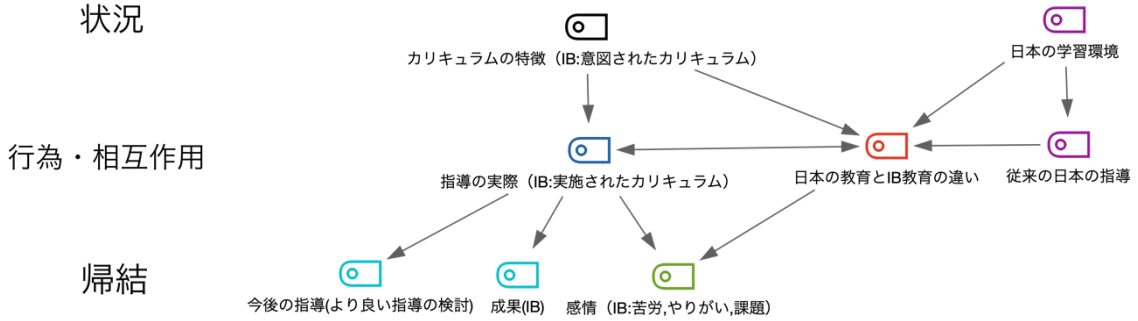
【表 3-5】コアカテゴリーとサブカテゴリー及び概念とその抽出数

コアカテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念の内容
IB 教育の性質 (71)	成果（13）	◆教員の成長（12）	自身にどのような成長があったか
		◆生徒の変化（1）	教員の捉える生徒の活動の変化
	今後の指導（3）	◆より良い指導の検討（3）	現状を踏まえてどのような改善が考えられるか
	指導の実際 (10)	◆指導の具体（3）	実際に行なった具体的な指導
		◆問いと探究の手法（7）	どのような問いや探究を心がけているか
	カリキュラムの特徴（26）	◆学習環境（10）	特徴的だと考えられる点についての意見
		◆教科の特徴（16）	教科と関連のあるカリキュラムの特徴
	感情（19）	◆指導の困難（6）	指導の困難に関する感情
		◆運営・プログラムの課題（10）	運営・プログラムの課題に関する感情
		◆やりがい（2）	教える事に対するやりがいに関する感情
日本の教育の性質 (13)	日本の学習環境 (5)	◆日本の学習環境（5）	日本で授業を行う環境に対する意見
	従来の指導（8）	◆指導法（6）	これまでの経験における指導
		◆指導の制約（2）	これまでの指導の制約
教育手法の比較 (13)	日本の教育と IB 教育の比較 (13)	◆日本と IB の違い (11)	教育手法の違いの比較
		◆日本と IB の類似性（2）	教育手法の類似点の比較

上記の結果から、主に《IB 教育の性質》についての議論が行われ、《日本の教育の性質》や《教育手法の比較》については回答がやや少ないという結果になった。さらに、〈日本の教育と IB 教育の比較〉からは[日本と IB の違い]と[日本と IB の類似性]が抽出されたが、類似性についてもそれぞれの教育の良さを検討する上で重要であるため、今後の質問の工夫が求められる。

2）カテゴリーと概念の相互関係の仮説モデル

フォーカス・グループ・インタビューにより得られたカテゴリーの相互関係を示すため、木村（2010）の M-GTA における概念とカテゴリーの関連づけを参照し、「現象の構造とプロセスを把握するための枠組み」（戈木、2006）である、「状況（条件）」、「行為・相互作用」、「帰結」のパラダイムの 3 層に分類した。その上で、各カテゴリー間の関連とインタビューデータから、以下の通り、川喜田（1967）の KJ 法を援用して相互関係の図式化を行った。



【図 3-1】パラダイムの 3 層に対応づけた抽出したカテゴリーの相互関係

前述の表 3-5 を相互関係の図と対応させて考えると、《IB 教育の性質》に関連する左側の 6 つのカテゴリーの概念の抽出数は 71 となり、おおよそインタビューの質問順と矢印の流れに対応が見られる。一方、それ以外の概念の抽出数は 26 となり、今後日本の教育についても IB との対比や共通点に関わるインタビュー項目を増やすことで、教員の語りも増やす必要があるといえる。

上図の議論の流れを踏まえて、フォーカス・グループ・インタビューにおける、IB 教員の視点による生徒の学習のプロセスを捉えるために、コアカテゴリー《IB 教育の性質》の再分脈化を行い、その特徴を描写することとした。

3) コアカテゴリー《IB 教育の性質》における現象とその過程

IB の意図されたカリキュラム

プロトコルデータの分析から、教員は「根拠を元に物事を考えてそれを表現する、簡単に話したりっているのは、少しずつできるようになってきているのかな」と生徒中心の議論によってスキルが高まる状況を語り、議論については「この人数じゃないとできない教育」という指摘からも分かるように個に合わせた指導が求められ、「これからの世の中には多分必要になって、変えていかなきゃいけない教育のやり方」などとその[学習環境]への評価も見られた。具体的には「EnglishB はやっぱり言語の習得の授業なので、他の科目と比べると、よりスキルを高めるというような視点の授業」や「実験がすごい多い」という[教科の特徴]があり、「IB の音楽は、将来、音楽家になりたいっていう人も取れるというふうにうたっておきながらも、週 3 時間しかない」など「求められるものが高い」ことやプログラムの課題についても述べられた。

IB の実施されたカリキュラム

このように意図されたカリキュラムとして〈カリキュラムの特徴〉が語られる一方で、実施されたカリキュラムとして、音楽では「分析をひたすらしている印象」や英語では「前倒しで授業を始めてるので、全てのやらなきゃいけないテーマとかっていうところは、十分網羅できるだけの時間はある」など〈実際の指導〉の内実が語られた。授業においては、「オー

プンな問いを使ってディスカッションしたりとか、探求したりとかっていうことが多い」、「いかに自分で調べるかっていうふうに誘導」、「あんまり教えるということは、しなかった」といった[問いと探究の手法]が重視されている状況がみられた。ところが、「知識が必要になる題材だと、ちょっと苦しい」、「ある程度はこっちが知識を入れるっていうのも、必要だった」といった省察から、知識と探究のバランスを意識した指導の重要性が表出した。教員は実践の積み重ねを通して、「目的在りきじゃなくなった」「こちらが考えていなかったところまで、深まったり広がったりしていく」といった指導の特徴や可能性を感じている。

IB 実践者の成果と今後

IB の教育実践から、[生徒の変化]について、「物事を疑って見るっていうか、疑問を投げかけるようになってきてる」ということが挙げられた。[教員の成長]については「あまりこちらがこれをやろうとか、これを教えようみたいな目的を全面に出さないようになった」、「生徒の学びの可能性は、広げられるんじゃないかなってのが見えてきた」、「TOK とかで・・・何やったとか、あんまり覚えてなかったりとかするので・・・いろんな分野の本をちょっと読んで、広く浅くでも知識を付けたい」、「自分の専門の知識をより深めるために本読んだりとか、多分、先生も勉強をよりする、強いられてる」といったことが挙げられた。〈今後の指導〉については、「TOK なんかでも、そのゲストで呼ぶ先生を IB の先生からだけじゃなくて、それ以外の科目からも呼んだりできたら、ちょっとお互いに理解も深まっていくかな」、「知識の領域を扱っていくところで、その当該の科目の先生にゲストで来てもらって、いろいろ生徒にプレゼンとかディスカッションした後に残った疑問の部分を、その先生も交えながらみんなで考えていければいい」などが語られた。

IB 担当教員の情意的側面

IB を担当する教員により、IB 教育に対する[やりがい]に関する回答で、「プラスアルファの実験も、さらにいっぱい用意しなければならないというところはあるんですけど。それは普通の国際、普通の高校ではこんなにいっぱい実験はできないので、そこは面白くはあります。」と語られた。実験に関して、「いかに自分で調べるかっていうふうに誘導をしていくかっていうので、今はちょっと悩んでいる」といった[指導の困難]の側面も同時にみられた。音楽に関しては「試験でジャズとかポップスがあると、やっぱりジャズ理論なんかはもう別物なので、今も勉強し直さなきゃいけないとかっていうことが多々あり、もう生徒より多分アップアップしてる」といた、広範な内容の[指導の困難]が指摘された。また、「知識がないと議論もできんなあというのが正直なところ」と、この項目でも知識と議論のバランスの問題が指摘された。[運営・プログラムの課題]については、「求められるものが高い割に、時間数が少ない」、「人の余裕が欲しいってのは多分、全部の先生が、全先生が思ってる」、「経験してるとか、IB で育ったっていう人とかが入ってくれるようになってくれると・・・」といった時間/人員/人材育成に関する課題が挙げられた。また、テキストが英語で書かれて

いることから「日本語だったらいいのになとはっきり言えば思います」という回答や、TOKの指導について「きっと、どの先生が見ても最初どういうことやるのか、具体的なイメージが湧きにくいのかなっていうふうに思います」といったプログラムに関わる課題が表出した。

日本の教育との関連

本予備調査において、全ての教員は日本の学習指導要領による指導の経験が 5 年以上あり、日本の高等学校の状況も理解した上で回答が行われた。日本の教育における[指導法]について、インタビューからは「やっぱりまだまだ内容を教えるに終始しています」、「手法としては枠に収めるっていう方法取ってる」といった回答があった。また、[指導の制約]については、「普通の高校ではこんなにいっぱい実験はできない」、「40 人 1 クラスで、この限られたコマ数でって中では結構厳しい」など、時間や教える人数に関する課題や自身が経験した学習環境の状況について語った。

上記のような《日本の教育の性質》を述べると同時に、《日本の教育の現状と IB 教育を比較》についても回答が見られた。まず、[日本と IB の違い]については「現場の感覚では違いはまだまだ大きいなと思っていて、特に評価、指導と評価のところは、結構、違いがあるのかな」、「スキルベースでこういうことができるように、こういうレベルに持っていきましょうみたいな IB のところとは、結構、差があるのかな」といった回答が述べられており、目標と評価に関して違いを感じている状況がみられた。一方で「文科の英語の授業と変わらないのかな」、「目指してるところっていうのは、英語に関しては同じ」など[日本と IB の類似性]を指摘する教員もおり、教科によって感じ方にも差が出ることも考えられる。さらに、[日本と IB の違い]について「やり方とかの深さとか広さとかっていうところの違い」、「生徒に関わる時間とか、フィードバックする時間も含めたら、やっぱりこの人数じゃないとできない教育」といった語りが抽出され、IB によって身に付く力の深さや広さを評価し、時間や人数などの教育的リソースについても恵まれていると評価しているといえる。

3-6. まとめ

本予備調査では M-GTA を用いて、教員 5 名のフォーカス・グループ・インタビューの質的分析を行った。その結果、インタビューの再分脈化を行い、①IB の意図されたカリキュラム、②IB の実施されたカリキュラム、③IB 実践者の成果と今後、④IB 担当教員の情意的側面⑤日本の教育との関連の 5 つの分脈を生成した。

これらの文脈と研究目的として挙げた、『IB カリキュラムのどの側面が学ぶ態度等を育んでいるか』、『IB 教育が採用しているいかなる教育方法が学ぶ態度等を育んでいるか』、『生徒は、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体性を持って、いかに学ぶ態度等を育んでいるか』の３項目との対応を以下の通り検討する。

第一に、『IB カリキュラムのどの側面が学ぶ態度等を育んでいるか』については、①IB の

意図されたカリキュラムの文脈と対応づけることができる。インタビューでは教員が生徒中心の議論によってスキルが高まっている状況を語り、少人数授業という学習環境によって実現していることを指摘した。英語、理科、音楽のそれぞれのカリキュラムの具体が描写され、求められるレベルの高さが浮き彫りになった。

第二に、『IB 教育が採用しているいかなる教育方法が学ぶ態度等を育んでいるか』については、②IB の実施されたカリキュラム及び③IB 実践者の成果と今後の文脈と対応づけることができる。インタビューでは、音楽や英語の指導の内実が語られ、共通点として、オープンな問い、ディスカッションや探究などの教育手法が挙げられる一方で、知識の獲得とのバランスの難しさが指摘された。教員自身も IB 教育による深まりや広がりといった可能性を感じている状況がみられた。

第三に、『生徒は、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体性を持って、いかに学ぶ態度等を育んでいるか』について検討する。①知識・技能に関して、IB の実施されたカリキュラムから知識と探究のバランスを意識した指導の重要性が指摘された。②思考力・判断力・表現力については[生徒の変化]から、「物事を疑って見るっていうか、疑問を投げかけるようになってきてる」という、批判的思考力の高まりや主体的な学びと関連づきそうな回答が抽出された。③主体性については、[問いと探究の手法]から生徒が主体となって探究が行われるような授業形態が見られ、[日本と IB の違い]に表れる少人数による授業展開についても生徒同士の学びを促進する役目を果たしているということができる。今後のフォーカス・グループ・インタビューでは教員から見る、生徒の学びについてより詳細に聞き取りをすることで、生徒の成長の内実を明らかにすることができると考える。特に、評価の 3 観点に合わせて質問を準備し、回答を得ることでより詳細に生徒の獲得する資質能力の記述を抽出することができるのではないかと考える。

本予備調査では、分析手法として M-GTA を活用した。M-GTA のインタビューの再分脈化により、研究目的と対応する生徒の学びの状況を描写することができた。インタビューで抽出されるカテゴリーや概念を参照しながら、今後分析の幅を広げていくことで、より立体的に IB による生徒の学びの状況を明らかにできると考える。また、フォーカス・グループ・インタビューの教員の語りについて、カテゴリーと概念を表にまとめた。本予備調査の目的をふまえると、インタビューでさらに聞き出したい概念として[生徒の変化]や[日本と IB の類似性]が挙げられる。その中でも、生徒の①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体性の育成と関連する語りについて、インタビューガイドを調整するなどして、より多くの事例を抽出できるように検討する必要がある。

以上が 2019 年度に実施した IB 教員を対象としたインタビュー調査の分析であるが、今回の分析結果を一つの参考として、今後本研究で実施するインタビュー調査の項目を再検討する予定である。このように、複数の IB 認定校の教員に対するフォーカス・グループ・インタビューや個別に行なう半構造化インタビューを積み重ねていくことで、IB 教員が考える IB 教育の特徴、日本の学習指導要領に準拠した教育との共通点や相違点、自らの教員

としての変化や生徒の成長等を実証的に明らかにし、IB 教育の効果について検討していきたい。

【資料】

資料Ｃ：教員対象調査インタビューガイド

IB 認定校教員に対するインタビュー調査項目

1. 研究の目的

本研究の目的は、国際バカロレア（International Baccalaureate: IB）の教育効果を実証的に析出することにより、国内における IB 教育の普及、ならびに「主体的・対話的で深い学び」を実現するための好事例の蓄積・促進に寄与することである。なお、本研究は IB の教育効果について、①IB 教育が生徒に与える効果、および、②IB 教育が教員の授業実践に与える効果の 2 つの観点から取り組む。

・ 研究課題：日本の IB 認定校において、IB 教育が教員の授業実践に与える効果を明らかにする。〔統括：花井渉／大学入試センター〕

2019 年度（1 年目）は、先行研究の検討、IB 教員を対象としたインタビュー調査および授業研究を実施する。具体的には、IB 教員の養成・研修等に関する国内外の議論を整理した後、その結果を踏まえて IB 教員を対象としたインタビューガイドを作成し、調査を実施する。その際、a)教員は、日本の教育と IB 教育の違いをどのように認識しているのか、b)教員は、IB 教育の実践による自身の教員としての成長をいかに捉えているのかといった点に着目する。さらに、IB 認定校において授業研究を実施することにより、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための事例を蓄積・促進し、研究成果の学校現場への還元に努める。

2. 調査方法　本研究では、IB 認定校の教員に対して質的調査を通じて、上記目的に示した調査項目について聞き取りを実施する。具体的な研究方法としては、IB 認定校の教員に対してフォーカス・グループ（1 グループ 3～4 名。教科を超えた教員グループを想定）によるディスカッションや振り返り（省察）を通じて、IB 教育の実践や授業がもたらす教員の成長、変化、課題等について検討する。時間は 1 時間程度を予定している。なお、学校管理職や IB コーディネーターはグループに含まないこととする。

想定しているインタビュー項目は以下のとおりである；

a）教員は、日本の教育と IB 教育の違いをどのように認識しているのか

(1)　日本の教育と IB 教育の違いについて

・ 日本の教育と IB 教育について、もっとも大きな違いを感じるところは何か？（指導の計画、授業の構成、授業内容、授業における教員の役割、授業評価等）
・ IB の授業準備で心がけている点はあるか？ある場合は、具体的に何か？
・ 学習の方法（ATL）について、日頃の授業実践にどのように組み込んでいるか？
・ 教科指導と知の理論（TOK）をどのように連携させているか？

・ 国際的な視野（International Mindedness）の育成について、日頃の授業実践の中でどのように行なっているか？

(2) 教員の期待や生徒の成長について

・ 教員が考える IB を通じて身につくコンピテンシーとは何だと考えるか？
  - 「コンピテンシー（能力）」とは、単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができる力。
    http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1399302.htm（文科省 HP より）
・ 生徒にどのような力を身につけさせたいと考えているか？
・ 実際に、生徒にどのような成長がみられたか？どのような力が身についたと感じるか？（※すでに実施している場合）

(3) IB 教育に対する教員の評価

・ IB 教育を実践していく中で、または客観的に見て、どのような教育だと考えるか？どのように評価するか？

(4) IB 教育を実践する上での課題

・ IB 教育を実践していく上で感じる課題や困難な部分は何か？
・ IB の授業準備に際して、苦労している（した）点は何か？

b）教員は、IB 教育の実践による自身の教員としての成長をいかに捉えているのか

(1) 教員としての自身の変化

・ IB 教育を実践していく中で、ご自身の中で何か変化はあったか？具体的に、どのような変化があったか？
・ IB 教育の実践による自身の教員としての成長をいかに捉えているのか？

(2) 授業改善に向けた取り組み

・ 授業後の振り返りはどのように行なっているか？（自己評価、他教員や学校管理職との面談、実践記録を残す等）
・ 公開授業や授業研究等、自身の授業実践を振り返る（省察する）機会はあるか？

(3) 自己研鑽の機会（IB 教員研修・ワークショップ等）

・ IBO 主催のワークショップに参加して感じたこと
・ IBO 主催のワークショップ以外で自主研究会等に参加経験はあるか？どのような研究会で、IBO のワークショップとはどのような違いがあるか？
・ ワークショップや研究会にどのようなことを期待して参加しているのか？

その他、日頃の実践に取り組んでいく中で考えたこと、困難に感じたこと、関心したこと、発見（生徒およびご自身の成長・変化等）等

次に、本年度は、インタビュー項目の再検討を行なう上で、上記の分析結果を踏まえると同時に、実際の IB 認定校の教員に対して、上記のインタビュー項目の妥当性を検証することを目的として、プレインタビュー調査を実施した。さらに、IB 認定校において、入学前段階の生徒像として、どのような事項を求めているのか、どのような特徴をもった生徒の入学が期待されているのかについて、国内の IB ディプロマプログラム実施校 54 校(2020 年 11 月 30 日時点)のうち、学校教育法第 1 条に規定されている高等学校 33 校のウェブサイトや入試要項のテキスト分析を行なった。以下が、その実施報告である。

2020 年度定性研究班プレインタビュー実施報告

担当：御手洗明佳
（淑徳大学・准教授）

1. 概要

日時：2021 年 2 月 9 日（火）10:30~11:30（zoom）
対象校：B 中学・高等学校
対象者：G 先生
担当教科：社会科担当、MYP：地理、サービスアクション、DP：ビジネス・マネジメント
プレインタビュー実施の目的：新年度開始以降に、フォーカスインタビューを実施予定。質問項目や方法に不備はないかを確認するためにプレインタビューを実施した。

2. 質問項目

★氏名、勤務年数、教科

<u>a）教員は、日本の教育と IB 教育の違いをどのように認識しているのか</u>

(1)　従来の学習指導要領に則った教育と IB 教育の違いについて（自分が受けたり教えた経験から）
(2)　教員の期待や生徒の成長について
(3)　IB 教育に対する教員の評価（認識）
(4)　IB 教育を実践する上での課題

<u>b）教員は、IB 教育の実践による自身の教員としての成長をいかに捉えているのか</u>

(1)　教員としての自身の変化
(2)　授業改善に向けた取り組み
(3)　自己研鑽の機会（IB 教員研修・ワークショップ等）

3. 実施上の反省

- フォーカス・グループ・インタビューでは、5～6 名対象に 1 時間程度の時間を予定しているが、今回のプレインタビューでは 1 名に 50 分程度かかってしまった。質問項目は、(a)日本の教育と IB 教育の違いの認識と(b)教員自身の成長としてはいるが、下位項目が多いため質問の優先度を作成する必要があった。個人へのインタビューであれば、挙がったエピソードに沿って、質問項目を前後させることは可能であるが、フォーカス・グループ・インタビューの場合は、その方法でまとまるのかやや不安である。
- 相手が話しやすい、雰囲気や相槌にはより工夫が必要であると感じた。

4. インタビューの内容

【印象に残った内容】

a-1. 日本の教育と IB 教育の違いを感じるところ。

→現在教えている生徒は、問い・疑問を口にする。「なぜ」「どうして」をいえるカルチャーがある学校である。良い意味の生意気さを先生方が受け入れている。IB と関係あるかは不明。

a-1. 文科省が進めている探究型の学習と IB 教育の違いは？

→IB 校以前に勤めていた学校でも探究学習をしていたが、調べ学習のようなものになってしまっていたと感じる。IB の教員になって感じた違いは、IB は探究に対する評価基準があることや、ATL スキルがあり、その中のリサーチスキルでこれを身につけなければならないなどがしっかり提示されていたり、参考文献を MLA スタイルで書く、コピペ禁止などリサーチの基礎を教えなければならない。問いを立てて、仮説を立てるなど、ただの調べ学習で終わってはならない。探究の質を求められている。

a-2. 生徒の成長を感じる場面

→公民の授業で「理想の社会と日本の課題（政治思想のユニット）」で班活動していた際に、「自殺を容認すること」を主張する生徒がいてそれをきっかけに生徒それぞれは主張を始め、生徒から「哲学対話」をしたいとの要請があり、生徒自らで円を作り、授業が終わっても対話していたこと。生徒たちは、こうした葛藤になった際に「哲学対話」（道徳で実施）という手法をもっているのだと感じた。

a-3. IB 教育をどう捉えているか。

→探究型で主体性を目指すパッケージ。日本でも求められる主体性などを実施するのであれば、IB のパッケージを使うことは有効であると感じる。

a-4. IB 教育を実践する上での課題

→私の課題は、評価がクライテリア（ルーブリック）なので曖昧な点がある。客観的であるように心がけているが、やはりそれなりの経験を積まないとぶれる時がある。評価をより正確にできるようにならなければいけないことは、私を含め、IB 教育をはじめたばかりの教員の課題。

→IB の課題（IB が日本の学校に入っていた後に起こりうる問題）は、生徒の課題量が多く、セルフマネジメントを求められることが多い。これは本当の意味での探究ではないのではないかと思われかねない。タスクをこなす仕事のような。IB の目指す本質的な部分を教師が持たなければ、ただのタスクの多いプログラムになりかねない。最後は何を目指しているのか、評価は何のためにあるのか、などの理解がないと IB はただの大変なプログラムになるなと感じている。

b-1. 教員の成長（自身の変化）

→ファシリテーションスキルをもっと上げたいと思うようになった。つまり、日々ファシリテーションをすることが多い。生徒がしっかり課題をやってくること、教師がしっ

かりファシリテーションできるかで授業の質が変わってくると感じている。

b-2. 授業改善に関する取り組み

→組織としてはやっていないが、若手同士や個人では他の先生の zoom 授業へ参加するなど自主的にやっている。

b-3. IB ワークショップへの参加

→これは、コーディネータ（学校）から定期的に参加するように促される。自分は、去年の 2 月に 1 ヶ月ほどオンラインの「ビジネス・マネジメント」のワークショップに参加したが、オンライン上でのファリシテーションの方法やフィードバックの早さは大変参考になった。

→本学では、学内研修として IB コース non-IB コースの先生方全員で IB に関する研究を受けている（例：概念学習、ATL スキル）。それに対しては、それぞれの先生方の思いがあるかもしれないが、学校の基本的方針が探究型学習をベースとした主体的生徒の育成という意味では一貫している。

2020 年度定性研究班プレインタビュー実施報告

担当：田中佳太
（筑波大学大学院）

1. 概要

日時：2021 年 2 月 13 日（土）9:00~10:00（zoom）
対象校：C 高等学校　D 学院初等部
対象者：E 先生（C 高等学校）、F 先生（D 学院初等部）
担当教科：E 先生－Language A (Literature)　現代文 B、
　　F 先生－算数、国語、UOI
パイロット調査実施の目的：新年度開始以降に、フォーカス・グループ・インタビューを実施予定。
フォーカス・グループ・インタビューでも質問項目や方法に不備はないかをパイロット調査として確認する。

2. 質問項目

★氏名、勤務年数、教科

<u>a）教員は、日本の教育と IB 教育の違いをどのように認識しているのか</u>

(1)　従来の学習指導要領に則った教育と IB 教育の違いについて（自分が受けたり教えた経験から）
(2)　教員の期待や生徒の成長について
(3)　IB 教育を実践する上での課題
(4)　国際的な視野について

<u>b）教員は、IB 教育の実践による自身の教員としての成長をいかに捉えているのか</u>

(1)　教員としての自身の変化
(2)　授業改善に向けた取り組み
(3)　自己研鑽の機会（IB 教員研修・ワークショップ等）

3. 実施上の反省

- 予定では 5～6 名対象に 1 時間程度の時間を予定しているが、今回は 2 名に対して 60 分程度かかってしまった。今回は時間の制約があり、質問できない項目もあった。5～6 名に対して実施するとなると、より多くの時間がかかることが予想される。質問項目についてはより焦点化する等の改善が必要である。
- 今回のインタビュイーの解答には、IB 特有の事柄と判断できるのか判断が難しい事柄が多くあった。インタビューガイドの質問事項をより具体的にし、IB 教育のどの

ような点を深く掘り下げるのか、更なる検討をする必要があると感じた。

・ また (a)、(b)どちらについても深みのある解答を得ることが難しかった。フォーカス・グループ・インタビューには、インタビュイー間で相互作用が働き、より深い思考が促される利点がある。今回のパイロット調査では教科・校種が異なる教師が混在したが、例えば、同じ教科を担当する教師をフォーカス・グループの構成メンバーとして、インタビューを実施する等の工夫を通じてより具体的で深い、グループの構成についても検討する必要があると感じた。

4. インタビューの内容

【印象に残った内容】

a-1. 日本の教育と IB 教育の違いを感じるところ。

→IB は問いを考えることを重視するが日本の教育は答えを出すことを重視する。また授業の進め方でも IB では生徒の疑問を起点に何をどのように深めていくかを生徒と考えることができる。

指導という観点では、IB 教育の場合、教師が自分から考えや答えを言わないように、特に注意する。また質問をするときにはオープンエンドの質問をするように心がけている。

a-2. 児童生徒の成長と期待

→以前が生徒が議論をしているとき、うまく言いたいことが言えなかったりして涙をすることが多かった。しかし今は自分でどのように相談をするか考え、歩み寄りをするようになってきている。DP では最終試験のために文章を書く、構成を考えるなどのスキルが必要であり、練習をするなかでそういったスキルは確実に身に付いている。答えが分かりづらい問いにも粘り強く考え続けることができる人になってほしい。

子どもたちが色んな人がいるということを理解し、受け入れることができるようになってきた。

子どもには自分の言ったことに、色んな角度から理由付けができる。そんな子どもに成長してほしい。

a-3. IB 教育を実践する上での課題

→評価が曖昧な点がある。何をもって素晴らしい、なのかとか。境界線がすごく難しい。生徒が納得感を持つように、自己評価をつけさせ、教師側の評価との間で違いがあれば、なぜ違うのかということを考えたり、質問に来て考えて詰めるように促している。

a-4. 国際的視野について

→これをしてるから国際的視野とは言えない。一つの事象をみたときに、海外ではどうなのか？等をなげかけたり、調べさせたりするがちゃんとは出来てない。
Language A ではグローバルな問題を都営挙げなければならない。海外だけではなくて、グローバルに問題視されていることとの関連付けがある。また授業以外でも教室には日本人以外にも、留学生が 7 人いる。そこでいざこざがあったりとか衝突もある。HR の時間等で国際的視野を考えさせることはある。海外の人たちとどういう視野を持つかも大事だけど、同じ国だとしても考え方が違う。そういうことに気づいてもらうために話をします。

b-1. 教員の成長（自身の変化）
→ファシリテーションスキルの必要性を実感するようになった。また生徒たちの考えを聞くと、そういった考え方もあるのか、そういう解釈があるのか、という発見があり、学べることがたくさんある。
これまでは周りの先生に合わせようとしていたが、そういうことは気にせず、子どもの興味関心に沿った授業をするようになった。

b-2. 授業改善に関する取り組み
→manage back にある Unit Planner に単元に対する自分の振り返りを書いている。それを生徒も読むことができる。こうすることで自分の考えていることを生徒とも共有できる。コーディネーターや管理職から評価や振り返りの機会をもらったりすることはない。

b-3. 研修状況（IB ワークショップへの参加等）
→DP はワークショップへの参加が必須なので、TOK や LanguageA のワークショップに参加した。学校では毎週 1 回、IB 教員が集まる会議が設定されているが、なかなか時間が取れない。実施された時には授業を CAS や TOK とどのようにつなげるか、といった研修を行う。
自分の場合、学校の研修は初任者研修だけ。そこでは IB について学ぶ。有意義なのは学年会議やコーディネーターでの相談や対話。ここで授業をどうするか、などのアドバイスをもらう。

2020 年度定性研究班プレインタビュー実施報告

担当：伊藤健策
（筑波大学大学院）

1. 概要

日時：2021 年 2 月 13 日（土）14:15~15:15（zoom）
対象校：B 中学・高等学校、H 小学校
対象者：G 先生（B 中学・高等学校）、I 先生（H 小学校）
担当教科：
≪G 先生≫MYP：Individual societies（中 1 地理、中 3 公民、高 1 現代社会）、 DP：ビジネス・マネジメント（グループ 3）
≪I 先生≫PYP：UOI（4 年生）、MYP：Language acquisition（6 年生、中 1）
パイロット調査実施の目的：新年度開始以降に、フォーカス・グループ・インタビューを実施予定。
フォーカス・グループ・グループでも質問項目や方法に不備はないかをパイロット調査として確認する。

2. 質問項目

★氏名、教科、教員歴、担当授業のサイズ、生徒のバックグラウンド

<u>a）教員は、日本の教育と IB 教育の違いをどのように認識しているのか</u>

(1)　従来の学習指導要領に則った教育と IB 教育の違いについて（自分が受けたり教えた経験から）
(2)　教員の期待や生徒の成長について
(3)　IB 教育をどう捉えているか。（IB が抱える課題を中心に）
(4)　国際的視野について

<u>b）教員は、IB 教育の実践による自身の教員としての成長をいかに捉えているのか</u>

(1)　教員としての自身の変化
(2)　授業改善に向けた取り組み
(3)　自己研鑽の機会（IB 教員研修・ワークショップ等）

3. 実施上の反省・課題

・インタビューガイドに沿って質問をしていくと、IB 全般の話が主となり、担当の教科やプログラム（PYP/MYP/DP）の個別具体的な内容に踏み込むことが難しい。特に DP はその教科の専門的な知識をもった調査者が入り、より授業内容に踏みこんだインタビューを実施する必要性を感じた。

・一方、個別具体的に教員の経験を聞けば聞くほど、所属の学校の個別の事情が絡んでくる。そこで語られる「問題」が、IB 固有のものなのか、学校の文脈から来るものなのか、の判断は注意深く行われなければならない。
・フォーカス・グループ・インタビューを行うことで、他教員の話からの気付きを踏まえて答えてくれる場面もあり、より有益な回答を得られたのは長所であった。その意味で、どのようなメンバーでインタビューを行うのかは、調査結果に少なからず影響する。一方、1 時間というインタビュー時間を考えた場合、2 名でも時間が十分とは感じなかったので、一度に話を伺う人数は再考の余地があると思われる。フォーカス・グループの人選、人数については取材対象校にお任せするのではなく、こちらから一定のガイドラインを提示するのが良いのではと感じた。

4. インタビューの内容

【印象に残った内容】

a-1. 日本の教育と IB 教育の違いを感じるところ。

≪I 先生≫IB は概念学習（Key concept や Central idea）を重視している。普遍的なこと、概念を獲得するということを目的にしているため、それに至るプロセスについては教員の裁量に任されている。生徒の興味関心に合わせつつ授業を展開することも可能。

≪G 先生≫以前の職場では、「いかにわかりやすい授業をするか」ということを念頭に置いていたが、IB では「どうすれば良い議論ができるか」ということを優先して考えている。

a-2. 生徒にどのような力を身につけさせたいか

≪G 先生≫いろんな視点や考え方がある、ということは結構身についているし、文章を書いたり、考えを組み立てたりするというスキルも身に付く。しかし、パッションが弱いと感じている。もっと、生徒が揺さぶられる経験を取り入れたい。そのために、Service Action に力を入れたい。実際に社会のシビアな問題（女性差別問題等）に対して、問題解決のために Action するように促すようにしたい。

≪I 先生≫いろんな考えがあるということはよくわかっている。国際バカロレアはそもそも文化背景が様々である子どもたちを育てる、ということが前提だが、今の勤務校は階層や文化背景が同質である気がしている。そのため、安易に多様性を理解するのにとどまらず、自分と「本当に」異なる他者に直面して、多様性を受け入れる、批判的思考をするということが生徒の課題。そのために、色々な他者（障害を持つ人、Asian American の先生など）をゲストスピーカーとしてお呼びし、出逢わせるということを心掛けている。

a-3. IB 教育をどう捉えているか。（IB が抱える課題を中心に）

≪G 先生≫①DP コースに行く生徒を選抜している実態。→生徒の違いが出てきづらい。

②万遍なく課題をこなしていくことが求められる。→一つの課題へのこだわりを発揮させるのが難しい。③課題を「タスク」として捉えてしまう生徒も多く、生徒が常にタスクに追われていると感じるようになる。
≪I 先生≫教員に対する自由度が非常に大きいところはとても良いプログラムだと思う。プログラムへの期待が大きいが、概念を勉強する、ということゆえに考える内容が曖昧になったり、系統性がなかったりする。

a-4. 国際的視野について
≪G 先生≫担当が社会なので特にそう思うのかもしれないが、常にどの授業にもその要素はあると感じている。しかし、授業中に明示したり、特別意識をしたりはしていない。
≪I 先生≫Learner Profile は明示して使うが、国際的視野は IB の教授法に組み込まれているという認識。特にこれをやっているというのはないが、説明しようとすれば、どの授業を通してでも説明できる。

b-1. 教員の成長（自身の変化）
≪G 先生≫「問い」力、ファシリテーション力が成長したと思うし、もっと成長したい。生徒の思考がどうなっているかについて、より分かるようになった。周りの先生からの自身の評価を意識して、「しっかりと管理できている」ということを示そうとしなくなった。
≪I 先生≫以前苦手だった教科についても、相談したり、勉強したりするようになった。教科の捉え方、トピックの捉え方もいろんな角度からできるようになった。

b-2. 授業改善に関する取り組み
≪I 先生≫言葉の定義を丁寧に考えるようになった（ネットのサイトを見たり、論文を読んだりする）。概念的なことを扱うことで子どもたちに自由がある分、定義をしっかりと押さえる必要がある。そうでないと子どもたちの相互作用が生まれにくい。
≪G 先生≫オンライン授業で行った授業を見返し、自分の「問い」を分析している。また、リサーチ力をつける必要性を感じている。特に、アカデミックな価値を見抜く力が重要。査読スキルが高まれば、もっとレポートの価値を見抜けるようになる。これが評価のスキルに繋がり、いいフィードバックに結びつけられる。

b-3. IB ワークショップ等への参加
≪G 先生≫学内研修は学期の終わりにある。教員全体で取り組んでいるが、あまり上手くいっていないという印象。概念学習の授業の立て方や ATL スキルの組み込み方を共有するが、学校自体が「学力」をつける手段として IB を捉えており、IB の理念を踏まえたものになっていない面が課題。
≪I 先生≫学内 : 学期末ごとに探究部が主導で、Unit Planner の作り方を可視化したり、

IB leaner プロファイルを念頭に置いたプランナー作りをしたりしている。しかし、それよりも大切なのは学年会議や普段の会話での学びであると感じている。

国際バカロレア・ディプロマプログラム実施校における入学者像

担当：赤塚祐哉
（早稲田大学情報教育研究所 研究所員）

本節では、国際バカロレア（IB）ディプロマプログラムを提供している高等学校において、入学前段階の生徒像として、どのような事項を求めているのか整理した。本節の目的は、こうした生徒像を捉えることで、プログラム実施前において、どのような特徴をもった生徒の入学が期待されているのかを明らかにすることである。国内すべての IB 実施校では、入試等により選抜が行われているが、これまでに IB プログラム実施前の入り口段階にあたる部分の国内調査はまだなく、課題となっていた。そこで、各学校の入学者像について記述している箇所を抽出し、テキスト分析を加えることで国内 IB 実施校における全体的な傾向を捉えることを目指した。

調査方法

国内の IB ディプロマプログラム実施校 54 校(2020 年 11 月 30 日時点)のうち、学校教育法第 1 条に規定されている高等学校 33 校(2020 年 11 月 30 日時点)を調査対象とした。そのうち、高等学校段階から新規・編入学を認めている高等学校 32 校を分析対象とし、中学段階からのみの受け入れ校については調査対象から除外した。

分析にあたっては、各学校で公開しているウェブページや一般公開されている入試要項を参照した。そのうえで、入学者の受け入れ方針が記載されている箇所や求めている生徒像が明示されている箇所を選択した。選択した全ての文章をテキスト分析の対象とし、樋口耕一氏（立命館大学）により開発された KH Coder (Version 3)を用いてテキスト分析を実施した。

テキスト分析には様々な方法がある。近年は、KH Coder を用いたテキスト分析が普及しつつあり、教育の各分野でも多く利用されているツールである（例：内野、 平嶋 2017; 加納ら 2013 など)。加えて、テキスト分析の自動化によって、KH Coder の信頼性・妥当性が高まっていることから（樋口、 2017)、本ツールを用いた分析は、調査方法として妥当であると判断した。

結果

調査対象校のテキストを抽出した結果、総抽出語数は 1783 語であった。なお、抽出にあたっては、KH Coder 内で使用されている用語自動抽出システム「TermExtract」を用いて、意味としてまとまりのある語を複合語として抽出した（例：「批判的」＋「思考」＝「批判的思考」として抽出)。さらに品詞として、代名詞、固有名詞及び副詞を分析の対象から除くとともに、「人」、「人材」、「生徒」も対象外とした。なお、KH Coder では、活用のある

語をすべて基本形に直して抽出するため、すべての活用形で出現した回数を合計した。

表 3-6 はどのような語がどのくらいの対象校で用いられているのかといった使用頻度を表している。特に使用頻度の高い 10 個の語を抽出した。

【表 3-6】 上位語の抽出結果と掲載校数

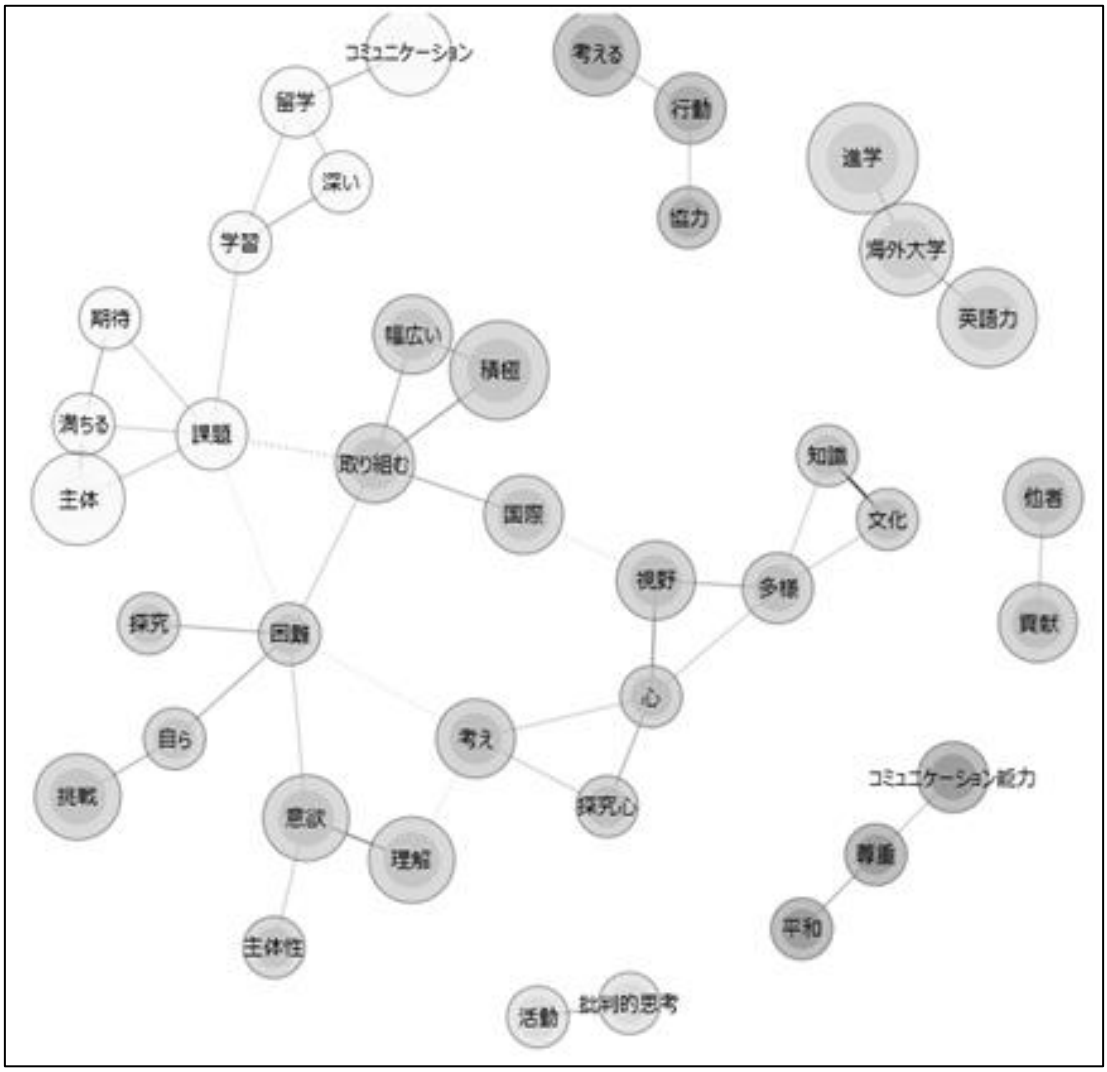
抽出語	掲載校数
進学	10
世界	10
英語力	8
海外大学	7
積極	7
海外	6
考える	6
主体	6
大学	6
挑戦	6

抽出された語について、それぞれがどのような文脈で用いられているのかを「KWIC（keyword in context）コンコーダンス」と呼ばれる機能を用いて確認すると、最も多く抽出された「進学」は、「国内・海外の大学に進学したい人」といった文脈で使用されている。このことから、IB ディプロマプログラムを履修しようとする生徒たちの進路として、大学進学を基本としていることが確認できる。

「進学」と同様に多く抽出された「世界」は、「世界でリーダーシップを発揮できる」、「世界を切り拓くことができる」、「世界にポジティブな変化を起こす」といった文脈で使用されていた。このように、自らが主体的に世界規模で関わっていこうとする積極的な人物を求めていることが読み取れる。

続いて多く抽出された語が「英語力」である。「高い英語力」、「学問研究にも耐えうる英語力」、「英検 2 級以上に相当する英語力」といった文脈で使用されており、IB を履修しようとしている生徒には、高度な英語力を求めていることが確認できる。

そして図 3-2 は、全対象校の文章中に出現する語が、どのような語と共に出現しているのかといった関係性を可視化したものである。作成にあたっては、KH Coder における共起ネットワーク分析機能を用いた。出現回数が多い語ほど円が大きく描かれている。また、実線で結ばれている語は関連性が強い（共起の程度が高い）ことを示し、点線で結ばれている語は緩やかな関係性を示している。共起の程度は Jaccard 係数で数値化され、KH Coder 内で自動処理が行われている。なお、円の位置や近さには特段の意味はない。



【図 3-2】 全対象校における共起ネットワーク

図 3-2 をみると「進学」、「海外大学」、「英語力」といった 3 つの語が結び付いていること確認できる。具体的な文脈では、「海外大学や英語で授業を展開する国内の大学に進学したい人」、「英語運用力を高めたい人。海外大学・国内国際系大学に進学したい人」等といった記述が確認できる。ここから、対象校全体の傾向として、進学先として海外大学も視野に入れていること、そのための英語力が不可欠であることが読み取れる。加えて「考える」、「行動」、「協力」といった語が互いに関連していることが確認できる。互いに協力し合って考えたり、行動できたりできる生徒が求められていることが読み取れる。そして「積極」、「幅広い」、「取り組む」、「国際」、「困難」、「自ら」、「挑戦」といった語が関連付いている。IB ディプロマプログラムを履修しようとしている生徒像として、積極的な態度をもちながら幅広く物事に取り組み、国際的な視野から困難なことに自ら挑戦しようとする生徒が求められていることが分かる。

本節のまとめ

以上が、IB ディプロマプログラム実施校における、入学者像の全体的な傾向である。調査結果から、国内の IB ディプロマプログラム実施校の全体的な傾向として、以下３点の特徴をもった生徒の入学が期待されているといえる。

① 大学進学への意欲をもち、国内の大学に加え、海外の大学進学も視野に入れている生徒。
② 高度な英語力をもった生徒
③ 幅広く物事に取り組み、国際的な視野をもち、困難なことにも自ら積極的に挑戦しようとする生徒

無論、こうした特徴はあくまでも全体としての傾向であり、各学校によって求めている入学者像は異なる。しかし、国内の IB 教育実施校でどのような生徒の入学を期待し、プログラムを通してどのような能力を育成しようとしているのか、といった傾向を捉えるための基礎資料として活用できるのではないだろうか。

以上のように、本研究に先立ち、定性研究班では、2019 年に実施したインタビュー調査の分析、インタビュー項目の妥当性を検証するための予備調査、そして本研究で対象となる IB 認定校を含む学校において、入学前に生徒に期待する事項を明らかにするためのテキスト分析を行なった。これにより、本研究におけるインタビュー項目を再検討する際の検討事項やフォーカス・グループ・インタビューを実施する際の留意点や定性研究班の構成員間で事前に共有すべき事項について明らかにすることができた。これらの分析結果をもとに、来年度本格実施する調査準備を着実に進めていきたい。

第 4 章　今年度の研究成果

本章では、まとめとして本事業の今年度における成果概要を下記 3 点に大別して示す。

1. 事業体制の整備、拡充

申請時点から事業体制は一定程度、整備されていたが、事業開始に伴い、さらに拡充を図った。具体的には、研究分担者として松本暢平先生（千葉大学）に新たにご参画頂いた。松本先生は統計分析の専門家であり、量的調査の体制拡充に寄与すると考えられる。また、研究協力者として、IB 教育の専門的な見識を豊富に有している江里口歡人先生（玉川大学)、渋谷真樹先生（日本赤十字看護大学)、原和久先生（都留文科大学）の 3 名にもご参画頂いた。

事務局体制としては、本事業の専任研究員として菅井篤研究員、事務補佐員として池田亜都沙職員を新規に雇用した。人員雇用に伴い、筑波大学内に本事業専用の IB 教育研究室を設け、施設、設備の充実も図った。

2. 研究倫理の申請、承認

次に、本事業の調査実施に先立ち、研究倫理審査申請を行った。事業開始後、全体打ち合わせ等で、調査内容等を詰め、申請書を作成したため、最終的に 2020 年 12 月 15 日に筑波大学人間系研究倫理委員会に研究倫理審査申請を実施した。結果的に、2021 年 1 月 15 日に当該申請が承認された（課題番号：筑 2020-158A 号)。 詳細は添付資料を参照されたい。

・申請者（研究責任者）　人間系　教授　井田　仁康
・課題名　IB 教育の受講によって児童生徒が培う学力の変化に係る調査研究
・研究分担者　人間系　助教　川口　純
　　人間系　助教　菊地　かおり
　　人間総合科学研究科教育基礎学専攻／日本学術振興会特別研究員
　　江幡　知佳
・有効期間　2021 年 1 月 15 日～2023 年 3 月 31 日

3. 研究成果

研究成果としては、本報告書の 2 章、3 章で既に示している通り、IB 教育の効果に関する先行研究を丹念に行い、全体議論においても、調査枠組みを丁寧に構築した。先行研究の検討においては、IB 教育の効果というこれまで日本では明らかにされていない研究分野において、英国や米国の研究蓄積を中心に既存の実証研究の成果を中心に整理、分析した。多角的な分析視座を用いることが改めて確認された一方で、現実的に実証可能な時間的制約、対象の制約等に鑑み、研究枠組みを構築した。

具体的には、上述の通り、量的調査班と質的調査班に分かれて、IB 教育の効果について

その全体像を実証的に示すことが可能な枠組みを設定した。量的調査班では、質問紙調査法として、質問項目、実施対象者の検討を実施した。複数回に渡る検討会を経て、添付資料の通り、質問項目が完成し、調査対象者の設定、確保も既に完了している。

質的調査班では、IB 教育の鍵を握る教員を対象とした調査枠組みを構築した。IB 教員の養成・研修等に関する国内外の議論を整理した後、当該結果を踏まえて教員を対象としたインタビューガイドを作成し、プレインタビュー調査を実施した。現状、十分な分析は実施できていないが、2021 年 3 月より、インタビュー調査を本格化させる計画である。

以上、今年度の研究成果として、上記の 3 点につき、示したが、今年度は研究の準備段階として位置付け、2 年目である来年度は、推進段階とし、確実に調査研究の成果を得るため、事業を遂行していく計画である。

【巻末資料】

「文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム　IB 教育研究報告」スライド資料

本資料は、2020 年 9 月 12 日に、本研究グループのメンバーである菊地かおり（筑波大学）が、IB 教育 e フォーラム日本 2020 分科会 1 にて発表した際のスライド資料である。

IB教育eフォーラム日本2020
2020.9.12　分科会 1

文部科学省IB教育推進コンソーシアム
IB教育研究報告

菊地かおり（筑波大学）

0．本日の報告内容

- 文部科学省国際バカロレア（IB）教育推進コンソーシアム研究プロジェクト「日本における国際バカロレア教育の効果に関する研究」2019年度の成果の概要
- 報告書は、コンソーシアムウェブサイトから入手可能（https://ibconsortium.mext.go.jp/researches/）

1．研究組織

日本国際バカロレア教育学会・研究委員会

- 研究代表者：　川口 純（筑波大学）

- 花井 渉（大学入試センター）、井上 志音（灘高等学校）
- 木村 光宏（神奈川県立横浜国際高等学校）
- 齊藤 貴浩（大阪大学）、赤塚 祐哉（早稲田大学）
- 増子 雄士（筑波大学）、江幡 知佳（筑波大学大学院）

1．研究の目的・方法

- 国際バカロレア（以下、IB）の**教育効果**を実証的に析出することにより、国内におけるIB教育の普及、ならびに「主体的・対話的で深い学び」を実現するための好事例の蓄積・促進に寄与することを目的とする。
- ①IB教育が**生徒に与える効果**を、とりわけ非認知能力に焦点を当てて明らかにする〈生徒対象調査〉→**質問紙調査**
- ②IB教育が**教員の授業実践に与える効果**を明らかにする〈教員対象調査〉→**インタビュー調査**

2．先行研究〈アメリカ〉

- **IBの教育効果研究…担当：江幡**
  - 世界中の国際バカロレア（IB）認定校のうちの**約35%**を占める
  - 公立高校における**カリキュラム改善のための手段**の一つとしてのIBの導入
  - IB自体が重視する能力観よりも、「公教育で何が問題とされているか」、「その問題をIBの導入・実施は解決しうるか」という観点から研究が蓄積されてきた（**費用対効果**への関心）

2．先行研究〈アメリカ〉

- **カレッジ・レディネスに関する研究Ⅰ／Conley & Ward（2009）**
  - アメリカにおける大学準備プログラムとしてIBの有効性
  - IBと「大学での成功に必要な知識とスキル（Knowledge and Skills for University Success: KSUS）」との整合性を検証
  - 全ての科目でIBとKSUSとの整合性が強く裏づけられた

2．先行研究〈アメリカ〉

- **カレッジ・レディネスに関する研究Ⅱ／Conley *et al.*（2014）**

➢ オレゴン大学に在学するIB経験者（IBを4科目以上履修）と非IB経験者を、①**学問的側面**…GPAや定着率、数学のクラス編成テストの得点）、②**非学問的側面**…「大学とキャリアに向けた4つの準備（Four Keys to College and Career Readiness）」の二つの観点から比較

2．先行研究〈アメリカ〉

- **カレッジ・レディネスに関する研究Ⅱ／Conley *et al.*（2014）**

➢ 学問的側面と非学問的側面における**IB経験者の優位性**が裏づけられた

➢ IBは、「生徒が、必要な知識を獲得することだけでなく、非学問的スキルを身につけることで、**自らの学びを管理する**（own learning）ことを可能にする」と結論づけている（**知識＋スキルや態度**の重要性）

2．先行研究〈イギリス〉

- **IB導入をめぐる動向…担当：花井**
  - IBは、後期中等教育資格及び大学入学資格である「GCE-Aレベル」（以下、Aレベル）の改革の必要性から注目され、大学入学資格の新たな選択肢となっている
  - Aレベル＝学問重視の資格…3科目に限定した狭く深い学び
  - 学習内容の幅と深さのバランスのとれた資格→IBへの着目

2．先行研究〈イギリス〉

- 2006年　ブレア労働党政権…IBを導入する学校への財政支援策
- 2010年　キャメロン保守党政権…財政緊縮策→IB認定校の大幅な減少／科目選択におけるIBの柔軟性の低さ
- イギリス独自のバカロレア型資格の開発・導入が進む…教科横断的な学習内容を含む**コア学習**の要素
  - IBは**資格試験制度改革**の促進要因として一定の効果があった
  - **非認知的な能力やスキルの適切な認証基準**の設定が課題

2．先行研究〈日本〉

- **海外国際学校に通う日本人IB生の調査／相良・岩崎（2007）、岩崎（2018）**

➢ 在学生…質問紙調査（n=56）、インタビュー調査（n=25）

➢ IBで身についた能力（質問紙調査で8割以上が「そう思う」）

✓ 理論的に考える力、語学力、異文化を受容する力、情報を収集する力、自己表現力、問題を発見する力《問題発見・情報収集・表現する力＝研究志向的能力》

2．先行研究〈日本〉

- **海外国際学校に通う日本人IB生の調査／相良・岩崎（2007）、岩崎（2018）**

➢ 修了生…インタビュー調査（n=13）、質問紙調査（n=8）

➢ IBで身についた能力（質問紙調査で8割以上が「そう思う」）

✓ 異文化を受容する力、語学力／IBの効果について、意識化していた人は少ない

2．先行研究〈日本〉

- **日本語DPの効果測定のためのベースラインデータの収集／Yamamoto *et al.*（2016）**

➢ 日本語DPを履修するIB生と非IB生への質問紙調査（n=1,218）

➢ DP開始時点で抱いている抱負・希望・興味（IB生／非IB生）

✓ 高校卒業後：IB生の25％が海外大学進学希望（非IB生2%未満）
✓ 将来の仕事：IB生は国際的かつリーダーシップを発揮できる環境を希望

3．生徒調査：質問紙の検討

- **日本語DPの効果測定のためのベースラインデータの収集／Yamamoto *et al.*（2016）**

➢ 山本ベバリーアン氏（大阪大学）の協力を得て、石倉佑季子氏（大阪大学）、齊藤貴浩氏（大阪大学）、ジャスティン・サンダース氏（テンプル大学）へのヒアリングを実施

➢ 上記研究で用いた質問紙をベースとして、本調査の質問紙を開発することについて承諾を得た

3．生徒調査（予備調査）の概要

- 実施時期：2019年12月
- 実施場所：国際バカロレアディプロマプログラム認定校（A校）
- 調査対象：高校1年生（n=23）

➢ A校では、ディプロマプログラムの開始は1年次の1月からであるため、本格的にプログラムが実施されているわけではないが、IBを意識した学び方で授業が実施されている。

3．生徒調査（予備調査）の結果

- 質問6「あなたが考える『国際的視野』について簡潔に説明してください」（n=23）

➢ 国際的視野に関連した**学びのプロセス**…**思考スキル①②**

①身の回りと世界をつなげることができた（4）
②客観的／異なる考え／海外の視点を理解できた（7）
③自ら調べる（英語ニュースを見る）ようになった（3）

3．生徒調査（予備調査）の結果

- 質問７「高校での学びを通じたあなた自身の変化や成長について、もっとも影響を与えたことは何ですか」（n=23）

➢ **獲得したコンピテンシー**に関する記述…**リサーチスキル①③**

①他の見解／客観的視点／根拠の重要性（４）
②批判的思考を持つ（３）
③文章の構成／情報収集への意識（２）
④コミュニケーション能力の向上（２）

3．生徒調査（予備調査）の結果

- 質問７「高校での学びを通じたあなた自身の変化や成長について、もっとも影響を与えたことは何ですか」（n=23）

➢ **自己管理スキル**…「時間のない中でどう勉強するかを考えさせられた」

➢ プログラム履修による**負担**…「生活リズムが乱れやすくなった」「睡眠時間が減った」

4．教員調査の概要

- 国際バカロレアディプロマプログラム認定校の協力のもと、教員に対するインタビュー調査を実施

	実施日	調査対象	インフォーマント
2019年	12月25日（水）	A校	国語、理科、英語・TOK、音楽（4名）
2020年	1月24日（金）	B校	数学、生物・CAS、TOK・物理（3名）
	2月10日（月）	C校	DPコーディネーター（TOK担当）（1名）
	2月14日（金）	D校	世界史、英語、国語、美術（4名）

4．教員調査の概要：インタビューガイド

- **a)** 教員は、**日本の教育とIB教育の違い**をどのように認識しているのか
  - 教員の期待や生徒の成長／IB教育に対する教員の評価
  - IB教育を実践する上での課題
- **b)** 教員は、IB教育の実践による自身の**教員としての成長**をいかに捉えているのか
  - 授業改善に向けた取り組み／自己研鑽の機会

４．教員調査の結果：中間報告

- **a)** 教員は、**日本の教育とIB教育の違い**をどのように認識しているのか
  - **評価システム**が厳格である点、アプローチが**概念理解**を重視している点、知識を教え込むよりも論述や議論、実験等が多く、それを行なうために**生徒が知識を自ら調べて獲得**していくようにする点等の違いを認識していた。そのために、教員は概念理解や自ら知識を獲得するような仕掛けづくりを授業の中に取り込むようになったという回答が多く確認された。

４．教員調査の結果：中間報告

- **教員の期待や生徒の成長**
  - 「生徒は物事を疑ってみる」、「疑問を投げかけるようになった」、「分析の基礎として、根拠をもとに物事を考え、それを表現することが少しずつできるようになった」、「根拠などを生徒同士で問うようになった」、「論理的に考えるようになった」等、**物事を多角的に捉え、批判的に検討する力**や**根拠に基づいて、論理的に物事を考える思考力**が身についていると感じている教員が多かった。

4．教員調査の結果：中間報告

- **教員の期待や生徒の成長**
  - 「生徒からの『先生これで良いですか？』という問いが減った。はじめは失敗するのが不安で、先生に正解を聞いてしまうが、色々なことが世の中で起きていることに気が付き、そこから生徒同士で話しあって答えが一つではないと気づいていった」
  - 授業の中で生徒にリフレクション（振り返り）をさせたり、ポートフォリオを記録させたりすることで、**生徒自身が自分の学びを深めることができる**ようになった。

4．教員調査の結果：中間報告

- **b)** 教員は、IB教育の実践による自身の**教員としての成長**をいかに捉えているのか
  - 「目的ありきではなくなり、学習が発展的にあるいは深くなった」、「以前は単元の目標がありきで、枠におさめる傾向にあった。結果として深い学びにならなかった」、「IBでは『これを教えよう』とならなくなった。結果として深くて広い学びになっている」等、**教え込むことから枠におさめないことを意識する**ことで深い学びにつなげる教員が多かった。

4．教員調査の結果：中間報告

- **b)** 教員は、IB教育の実践による自身の**教員としての成長**をいかに捉えているのか
  - 「自分も一つしか問いがないと、答えを誘導するようになってしまう。だからより俯瞰するように勉強する必要がある」、「ワークショップで教員も学習者ですからねと言われた。そこが変化したポイント」等、**生徒の多様な関心や問いに対して、教員がそれを受け止め、深めていく**ために、**自らも学習者として学ぶ**教員が多い。

4．教員調査の結果：中間報告

- **授業改善に向けた取り組み**
  - 「教材は何でも良いと感じるようになった。一般のクラスでも…教材を一応用意するが、色々な題材などを持ってきて指導できるようになった」→IB教育の経験が**一般コースの授業改善**に
  - 「教材研究のやり方が変わった。…生徒へのファシリテーションを行なうためにするようになった。…生徒が調べたりすることを奪わないようになり、聞かれた際にしっかりと答えられるようにするため」→**教材研究への取り組み方**の変化

5．研究の成果と今後の課題

- ①アメリカやイギリスにおけるIBに関する研究蓄積を中心とした**既存の実証研究の成果の整理・分析**
- ②IB教育を通じて育成されるコンピテンシー測定のための**質問紙の開発**
- ③IB教育の鍵を握る教員を対象とした**インタビューガイドの作成及び調査の実施**

➢ **今後の課題**…継続的なデータ収集・分析、生徒へのインタビュー調査、授業観察及び授業研究の実施

6．主要参考文献

- **Conley, D., & Ward, T. (2009)** *International baccalaureate standards development and alignment project*. Eugene: Educational Policy Improvement Center.
- **Conley, D., McGaughy, C., Davis-Molin, W., Farkas, R., Fukuda, E. (2014)** *International Baccalaureate Diploma Programme: Examining College Readiness*. Educational Policy Improvement Center.
- **Yamamoto, B. A., Saito, T., Shibuya, M., Ishikura, Y., Gyenes, A., Kim, V., Mawer, K. and Kitano, C. (2016)** *Implementation and Impact of the Dual Language International Baccalaureate Diploma Programme (DP) in Japanese Secondary Schools: Final Report*, Bethesda, MD, USA: International Baccalaureate Organization.
- **相良憲昭、岩崎久美子編（2007）**『国際バカロレア: 世界が認める卓越した教育プログラム』明石書店.
- **岩崎久美子編（2018）**『国際バカロレアの挑戦: グローバル時代の世界標準プログラム』明石書店.

【引用・参照文献一覧】

Glaser、 B., & Strauss、 A. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Chicago, IL: Aldine Publishing Company.

原田杏子 (2004)「専門的相談はどのように遂行されるか-法律相談を題材とした質的研究-」『教育心理学研究』52、 344-355.

樋口耕一(2017)「計量テキスト分析およびKH coderの利用状況と展望」『社会学評論』68(3)、334-350.

加納寛子・菱田隆彰・長谷川元洋・古崎 晃司 (2013)「文部科学省検定教科書高等学校『情報」の用語分析（タブレット・スマホ時代の情報リテラシー・情報モラル教育、課題研究、学びの原点への回帰-学習の質を高める科学教育研究)」『日本科学教育学会年会論文集』37、 152-155.

川喜田 二郎 (1967)『発想法―創造性開発のために』中央公論社

木村晴・榊美知子 (2006)「感情の研究法」北村英哉・木村晴（編)『感情研究の新展開』ナカニシヤ出版.

木下康二 (2007)『ライヴ講義M-GTA実施的質的研究法　修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂

文部科学省 (2015a) 『新しい学習指導要領等が目指す姿』 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm （2021年2月18日閲覧）

文部科学省 (2015b) 『まち・ひと・しごと創生基本方針 2015－ローカル・アベノミクスの実現に向けて－』 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/__icsFiles/afieldfile/2015/08/10/1360841_10_1_1.pdf (2021年2月18日閲覧)

永山賀久 (2013) 「グローバル人材育成と国際バカロレアについて」『科学と教育』61(7), 330-333.

戈木クレイヒグル磁子 (2008)『質的研究ゼミナール　実践グラウンデッドセオリーアプローチ　現象をとらえる』新曜社.

齊藤貴浩、Gyenes, A.、石倉佑季子、渋谷真樹、Yamamoto, B. A. (2016)「国際バカロレアのデュアルランゲージ・ディプロマの開始時におけるベースライン・インディケーター開発の試み」日本評価学会第17回全国大会 (2016.11.27) 発表資料

渋谷真樹 (2020)「国際バカロレアが育成するコンピテンシー-学習者への聞き取り調査から-」『国際バカロレア教育研究』第4巻 29-38.

Strauss、 A., & Corbin、 J. (1990). *Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques*. New York: Sage: publications.

角南なおみ (2013)「子どもに肯定的変化を促す教師の関わりの特徴－修正版グラウンデッ

ド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成－」『教育心理学研究』61、323-339.
鈴木淳子 (2005)『調査的面接の技法』ナカニシヤ出版.
寺下貴美 (2011)「質的研究方法論－質的データを科学的に分析するために－」『日本放射線技術学会雑誌』第 67 巻 第 4 号.
内野駿介・平嶋美鈴 (2017)「外国語活動の授業構成と教師の信条の関係:学習指導案の計量テキスト分析を通して」『関東甲信越英語教育学会誌』31、 29-42.
Yamamoto、 B. A., Saito、 T., Shibuya、 M., Ishikura, Y., Gyenes, A., Kim, V., Mawer, K. and Kitano, C. (2016). *Implementation and Impact of the Dual Language International Baccalaureate Diploma Programme (DP) in Japanese Secondary Schools: Final Report,* Bethesda, MD, USA: International Baccalaureate Organization.

「令和 2 年度 IB の教育効果に関する調査研究事業」
2020 年度成果報告書

2021（令和 3）年 3 月 31 日発行